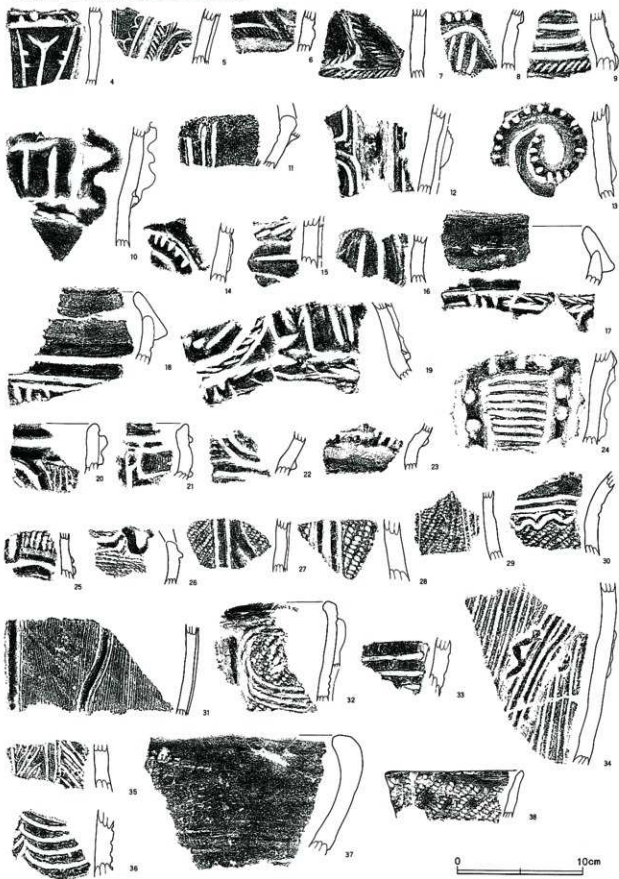
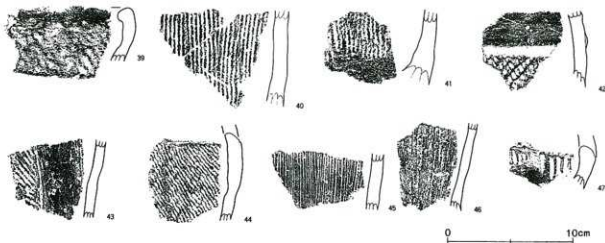


第139图 A区第49号住居跡出土土器(2)



第140図 A区第49号住居跡出土土器(3)



出土土器(第138図～第140図)

1は小型精製の深鉢である。サイズと細部のつくりを別にすれば、基本的にキャリバー類深鉢の器形と文様構成を踏襲している。

水平口縁で、1カ所に口縁部文様体から連続する突起を配するものと思われる。口縁部文様帯は上下を二本隆帯によって区画し、隆帯+沈線による入り組みモチーフが横位に連続して、間間に楕円形の区画が構成される。

頸部には無文帯が存在する。胴部は頸部との境をやはり2本の隆帯で区画する。二本隆帯の懸垂文と、一本隆帯の蛇行懸垂文が交互に垂下し、これに沈線によるなぞりが加えられる。

地文は縦位の撚糸文で、口縁部・胴部の別無く縦位回転で施文される。

口径15cm、突起部分を除く器高16.4cm、底径6cmを測る。

2はキャリバー類深鉢で、口縁から胴部中段にかけての部分が残存している。口縁部文様帯の幅が比較的狭いぶん、器形の変化に乏しく、寸胴な印象を与える土器である。

口縁部文様帯は上下を1条の隆帯で区画し、二本隆帯による波状の区画が横走し、隆帯が口縁に接する部分で受け口状の突起を形成する。突起の上には渦巻文が描かれる。全体に形骸化した繋弧文のモチーフで

あるということが出来る。

頸部には無文帯が存在する。頸部無文帯と胴部の文様帯の間は横位の二本隆帯によって区画される。胴部には2本隆帯の懸垂文と一本隆帯の蛇行懸垂文が交互に垂下する。

地文はRL単節の縄文が口縁部・胴部ともに縦位回転で施文される。口縁部文様帯においては部分的に充填の手法が用いられている。

3は浅鉢で、くの字に張り出す胴部中段の部分である。胴上半部の文様帯はキャリバー類深鉢の口縁部文様帯に由来する。隆帯による区画の内部に隆帯+沈線の渦巻文が描かれる。胴下半部の無文帯との境を区画する二本隆帯は間にわらび手状の沈線が巡り、これに沿って篋状工具先端を用いた斜位の集合沈線が施文される。地文は篋状工具による縦位の集合沈線である。

4～19は勝飯式の流れをくむ土器である。4は交互の刻みを伴う横位の隆帯が巡り、その下に平行沈線によって逆三角形の区画が構成される。区画内部には三叉文が描き込まれる。5は刻みを伴う断面台形の隆帯によって区画文が描かれる。区画内部には沈線文や、半截竹管状工具先端を用いた半円形の刺突列が施文される。6・7・9も5に類似の隆帯区画が描かれる。10は上下を斜位の刻みを伴う隆帯によって区画する口縁部文様帯である。文様帯は背の高いジグザグの隆帯によって縦位に分割される。区画内部には棒状工具に

よる縦位の平行沈線が描かれる。

11は深鉢頸部である。縦位の隆帯ないし貼付文がみられ、これを起点に棒状工具による平行沈線が垂下する。12は縦位の隆帯によって器面が分割され、左右に平行沈線によるパネル状の区画が描かれる。

13・14は刻みを伴う隆帯によって渦巻文が描かれる。15・16は隆帯による区画内部に棒状工具の沈線文が描かれる。

17・18はくの字に内屈する深鉢口縁部で、頸部との境にひさし状の段を形成する。頸部以下には隆帯による区画が設けられ、内部に沈線文が描かれる。

19は斜位、矢羽根状、交互刺突状などの刻みを伴った隆帯により区画文が描かれる。区画内部には棒状工具の沈線文が描かれる。

24は丸棒状工具による刻みを伴う隆帯によって窓枠状の区画が構成される。区画内部には横位の集合沈線が充填される。

20・21はキャリパー類深鉢の口縁部文様である。20は二本隆帯による渦巻文が描かれ、21は十字文が描かれる。地文はいずれも縦位の燃糸文である。

22は文様帯の下端を区画する隆帯である。二本隆帯の渦巻文が描かれ、地文は横位の燃糸文が施文される。23・25もこれと同じ部位で、数本の隆帯が文様モチーフと隆帯区画の間を連結する。頸部には無文帯が存在する。地文は縦位の燃糸文である。26は口縁部文様帯の一部で、交互刺突を伴うジグザグの隆帯がみられる。地文は横位の燃糸文である。

27・28は地文織文上に二本隆帯の懸垂文が垂下する。27は懸垂文から渦巻状の隆帯モチーフが分岐する部分であろう。

29は半裁竹管状工具の平行沈線文が垂下する。地文はR L単節縦位回転の縄文である。30はやはり半裁竹管状の工具による平行沈線によって文様が描かれる。頸部に無文帯を持ち、胴部との境を平行沈線によって区画する。この区画の下に沿って、同一工具による波

状の平行沈線が巡る。地文はR L単節縦位回転の縄文である。

31は隆帯による懸垂文と蛇行懸垂文が交互に垂下する胴部である。隆帯には半裁竹管状工具によるなぞりが加えられており、断面は丸味を帯びている。地文は櫛歯状工具による縦位の条線である。

32は深鉢口縁部で、口端が軽微に内屈する。口縁直下から縦位の隆帯が垂下し、左右に半裁竹管状工具の平行沈線による楕円形の区画が描かれる。地文はR L単節縦位回転の縄文で、口縁部から頸部まで一続きに施文される。

33は棒状工具による横位の平行沈線だけがみられる破片である。部位としては30の破片に近く、頸部無文帯と胴部文様帯との間の区画に相当する部分であると考えられ、地文はみられない。

34は曾利系の深鉢胴部である。半裁竹管状工具内面のなぞりが加えられた扁平な3～4本の隆帯が曲線モチーフを描き、両側に波状の浮線文が貼りつけられる。地文は半裁竹管状工具による集合沈線である。35・36も曾利系の深鉢である。35は平行沈線による懸垂文の間隔を斜方向の集合沈線で填めて、樹枝状のモチーフを描く。36は弧状の沈線が重畳して施文される。

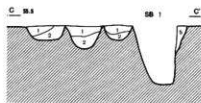
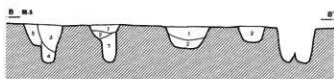
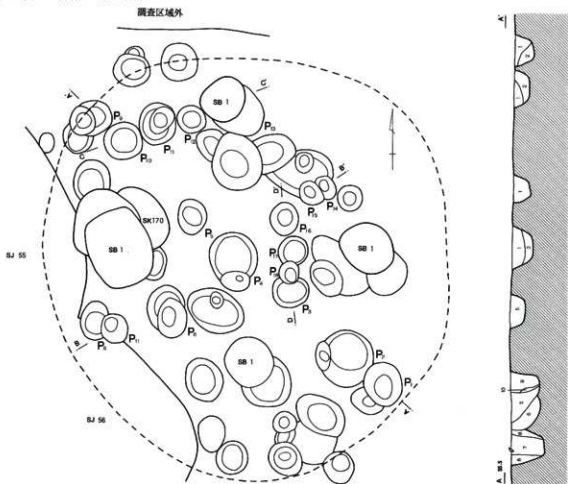
37は内湾する無文の口縁部で、頸部に1条の沈線が巡る。曾利系の小型深鉢に付随するものであろう。38はコップ形の小形深鉢口縁部で、R L単節縦位回転の縄文が施文される。

39は口端内屈する口縁部で、無節または燃りの弱い単節の縄文が施文される。40・41は燃糸文のみ施文される胴部である。

42は微隆起線による磨消しモチーフ、43は縦位の平行沈線による磨消しモチーフが描かれる。地文はいずれもL R単節の縄文である。

44はL R単節の縄文だけが施文される。45・46は櫛歯状工具の条線だけが施文される胴部である。47は無文地に縦位の刻みが巡る。

第141図 A区第51号住居跡

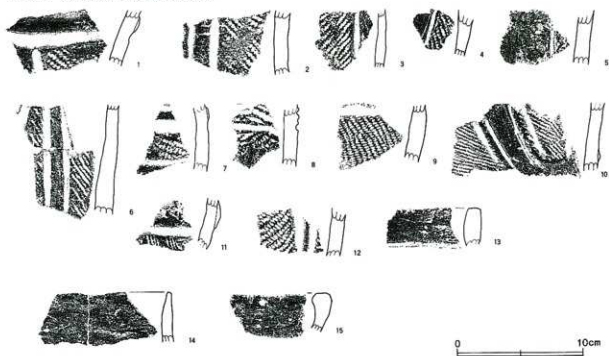


A区S J 5 1

- 1 褐色土 : ローム粒子やや多く含む
- 2 暗褐色土 : ぐすんだローム土
- 3 暗褐色土 : ロームブロック・ローム粒子少量含む
- 4 暗褐色土 : ロームブロックまばらに含む
- 5 暗褐色土 : ロームブロック多く含む 締まり欠く 人為的埋め戻しか
- 6 暗褐色土 : ローム粒子微量含む
- 7 黒褐色土 : ローム粒子微量含む
- 8 黒褐色土 : ロームブロック・ローム粒子微量含む 粘性强、締まり良し
- 9 暗褐色土 : ローム粒子微量含む 堅く締まっている
- 10 暗褐色土 : ローム粒子多く含む

0 2m

第142図 A区第51号住居跡出土土器



A区第51号住居跡 (第141図・第142図)

E-3・F-3区に所在する。第55・56号住居跡、第1号掘立柱建物跡、第170号土壇ほかと重複するが、それらとの新旧関係は不明である。

遺構は南東-北西に長い長楕円形の範囲にピット群のみが集中するもので、長径7.3m、短径5.5mほどである。壁・壁溝は一切検出されず、炉跡などの施設も残っていないため、本住居跡の主軸方向は不明である。ピットは深さ30~60cmで、配置に規則性はみられない。ただし、北西部分でピットが環状に巡る傾向がみられるなど、複数の遺構が複合している可能性もある。

遺物はピット内部から縄文時代中期後葉から末葉の土器片が少量出土している。

出土遺物 (第142図)

1・7・8はキャリパー類深鉢の口縁部および頸部付近の破片である。1は口縁部と胴部との境を隆帯によって区画され、胴部には磨消し懸垂文が垂下する。7は隆帯による区画文が構成される口縁部、8は口縁と胴部の境が沈線によって区画される。

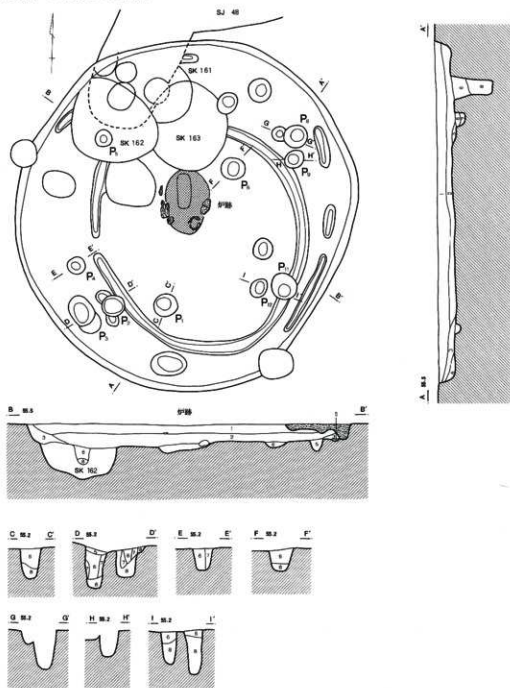
2~6は磨消し懸垂文の胴部である。10は微隆起線

によってY字形の磨消し文様が描かれる。地文は無刷しの縄文で、微隆起線の区画線に沿って充填施文される。また、縄文の一端が微隆起線の側縁に乗り上げる状態で施文される。

11は両耳壺の胴上半部である。キャリパー類深鉢の口縁部文様帯に由来する区画文が胴上半部に転写されるもので、胴下半部との境は扁平な隆帯+沈線によって区画される。地文は胴下半部では櫛歯状工具による縦位の条線であるが、胴上半部の区画内部では縄文が施文されるものと思われる。12は全体に丸味をもつため両耳壺の胴下半部と半断したが、深鉢胴部である可能性もある。幅狭の磨消し懸垂文が垂下する。地文はRL単節の縄文である。

13以下は無文の口縁部である。13は浅鉢口縁である。口唇は肥厚し、軽微に外屈する。口端上面は平坦に整形される。胴部との境には段を有する。14は両耳壺の口縁とみられる。断面は先細りしつつ軽微に外反する。15は口唇肥厚して内面が突出する。口端上面は平坦に整形される。浅鉢ないし曾利系の小型深鉢であろう。

第143図 A区第52号住居跡

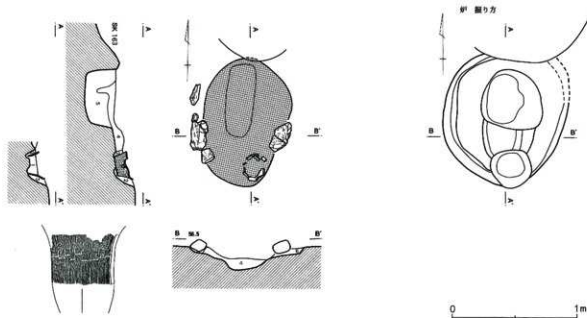


A区S J 52

- 1 黒褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多く含む 焼土粒子・炭化物少量含む
- 2 黒褐色土 : ロームブロック・ローム粒子やや多く含む 焼土粒子・炭化物少量含む
- 3 黒褐色土 : ロームブロック若干、ローム粒子多く含む
- 4 黒褐色土 : ロームブロック・ローム粒子を非常に多く含む
- 5 黒褐色土 : ローム粒子・ロームブロック若干含む
- 6 黒褐色土 : ローム粒子を多く含む
- 7 黒褐色土 : ローム粒子を少量含む
- 8 黒褐色土 : ロームブロック・ローム粒子を多く含む



第144図 A区第52号住居跡炉跡



A区S J 6 2炉跡

- 1 暗褐色土 : ローム粒子少量、焼土ブロック少量、焼土粒子やや多く、炭化物少量含む 締まり弱
 2 暗褐色土 : ローム粒子多量、焼土粒子少量含む 締まり弱
 3 暗褐色土 : ローム粒子少量、焼土粒子多量、炭化物少量含む 締まり弱

- 4 暗褐色土 : ローム粒子少量、焼土ブロック多量、焼土粒子・灰・炭化物少量含む 締まり弱
 5 灰黄褐色土 : ロームと灰色粘土の混土層 全体に炭化し締まり強、強く締まっている
 6 暗褐色土 : ロームブロック若干、ローム粒子多量含む 炉石固定のための埋土か

A区第52号住居跡 (第143図～第149図)

F-4・5、G-4・5区に所在する。第48号住居跡に切れられ、また、第162号土壌を切るものと思われる。このほか、第161・163号土壌とも重複関係にあるが、これらとの新旧関係は明らかでない。

直径約5.5mの不整形円形を呈する。壁の立ち上がりは比較的明確で、壁高は最も残りの良い部分で30cmを測る。床面は全体に緩やかな起伏を帯びており、炉跡の北西部分では他より若干低くなっている。

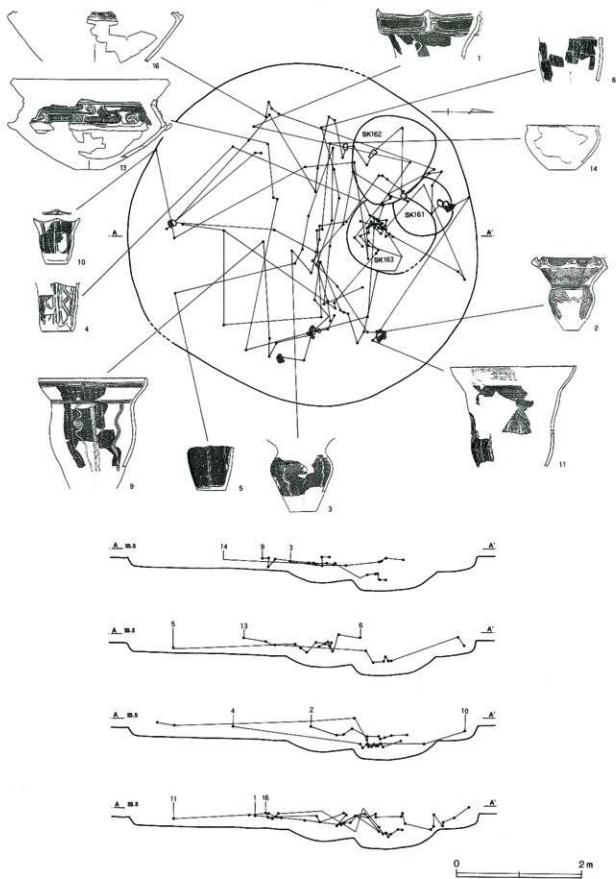
壁薄は床面上をほぼ2巡する。内周のものは長径3.6m、短径3.4mの不整形楕円形を呈し、西側の一カ所わずかに切れるほかは全周するが、外周のものは北西及び東の壁からそれぞれ十数cmの距離をおいてごく断片的に検出されたに過ぎない。いずれにせよ本住居跡は最低1回の建て替えない重複を経験しているものと思われる。

炉跡は床面はほぼ中央に位置する。部分的に石材を伴った石囲炉の一端に埋設土器を伴うもので、炉体土器の周囲に接して炉石を巡らせる一般的な土器囲い埋焼炉よりは、東関東における「複構造炉」に近いものである。

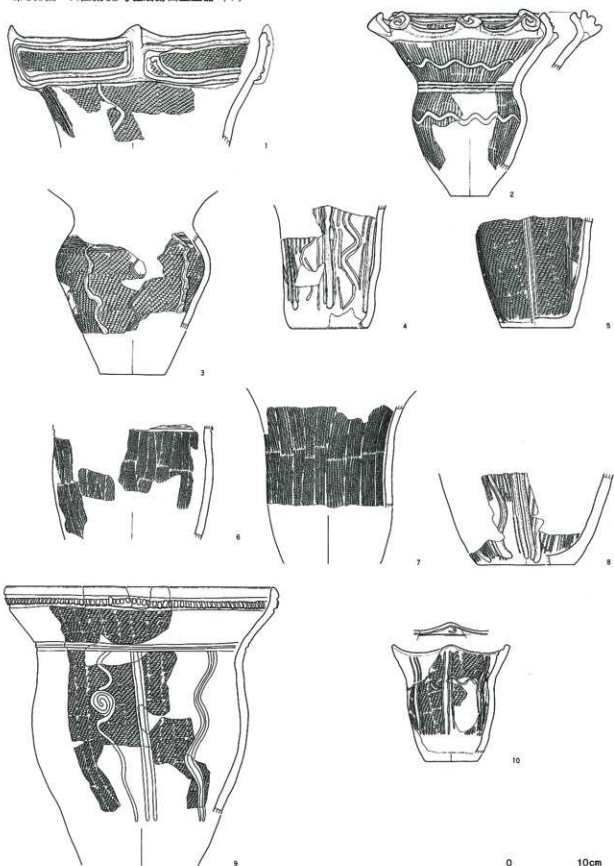
長径1m、短径60cmの不整形楕円形で、炉床面までの深さは17cmである。炉跡の北端部が第163号土壌とわずかに重複するが、両者の新旧関係は不明である。炉石は炉跡の東縁および西縁に残存するが、いずれもごく断片的なものである。

プランの南東部分がわずかに張り出し、ここにピットが穿たれ、小型の炉体土器が埋設される。炉体土器は頸部及び胴下半部を欠いた深鉢を正位に埋設するもので、土器の開口部は炉跡中央に向かってわずかに傾いた状態である。ピットの底径は炉体土器のそれにはほぼ等しい。

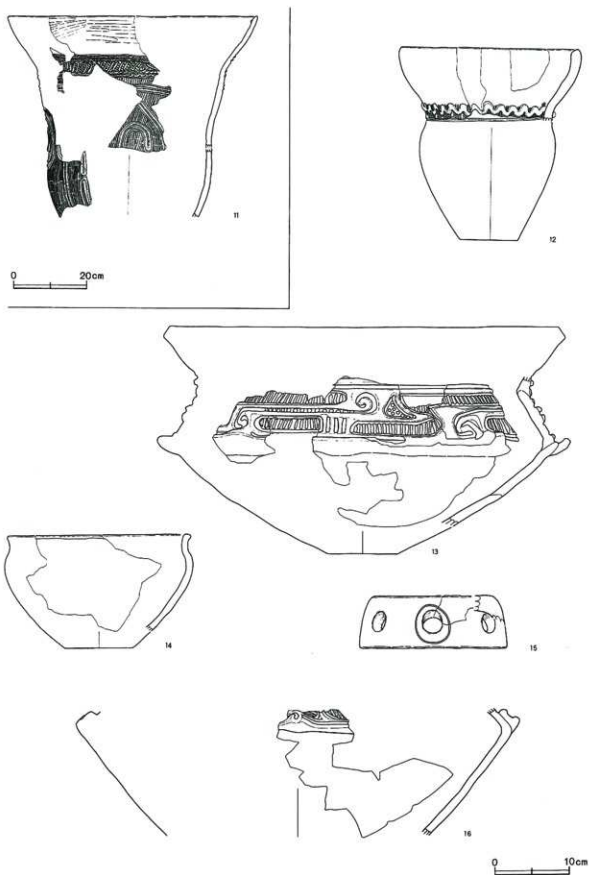
第145图 A区第52号住居跡遺物分布图



第146图 A区第52号住居跡出土土器(1)



第147图 A区第52号住居跡出土土器(2)



出土土器（第146図～第149図）

1はキャリパー類深鉢である。口縁から胴上半部にかけて残存する。4単位の小波状口縁をなし、波頂部から縦位の突起が垂下する。口縁部文様帯はこの突起によって4単位に分割され、それぞれ長方形の区画文を構成する。隆帯による渦巻文等は描かれない。

胴部には半裁竹管状工具の平行沈線による懸垂文と蛇行懸垂文が交互に配される。地文はRL単節の縄文で、縦位回転で施文される。

2もキャリパー類の深鉢で、底部を欠失する。口縁部文様帯は繫弧文で、渦巻文の描かれる8単位の突起と、これを連続する弧状の隆帯によって構成される。この繫弧モチーフの上に口唇が垂直に立ち上がり、棒状工具による2条の沈線が巡り、下段の沈線に沿って横位の刺突列が施文される。

胴部中段のくびれの部分に半裁竹管状工具による平行沈線が3重に巡り、頸部と胴下半部の文様帯を区画する。区画の上下に同一工具の平行沈線による波状のモチーフがそれぞれ描かれる。

地文は縦位の燃糸文で、口縁部文様帯を除く全面に施文される。

突起部分を除く最大径21.4cm、口径19.8cm、現存高20.6cmを測る。

3は深鉢胴下半部である。胴部中段のくびれ部分の直下が球脚状に張り出し、底部に向けて直線的に収束する。

胴部中段に半裁竹管状工具の平行沈線が数条巡り、同一工具の蛇行懸垂文と隆帯による蛇行懸垂文が交互に垂下する。地文はRL単節の縄文が縦位回転で施文される。底径20.6cmを測る。

4は深鉢の底部から胴下半部にかけての部分である。底部からはほぼ垂直に立ち上がる円筒形を呈する。隆帯による懸垂文が垂下し、隆帯の左右に沿って半裁竹管状工具の平行沈線が垂下する。

懸垂文どうしの間隙には、やはり半裁竹管状工具の平行沈線による蛇行懸垂文が垂下する。底径10cm、現存高16.4cmを測る。

5も深鉢で、胴部中段から上を欠失する。棒状工具による三本沈線の懸垂文が垂下する。地文はRL単節縦位回転の縄文である。底径9.6cm、現存高15cmを測る。

6は深鉢胴下半部で、2つの部分に分かれて断片的に出土した。胴部中段のくびれの部分に棒状工具の平行沈線が巡り、懸垂文はみられない。地文は縦位の燃糸文である。

7は深鉢胴部である。中段にごく緩やかにくびれを持ち、口縁部に向かって外反する。地文は縦位の燃糸文で、区画文・懸垂文などは施文されない。最大径19.8cm、現存高12.8cmを測る。

8は深鉢胴下半部から底部にかけての破片である。二本隆帯の懸垂文と一本隆帯の蛇行懸垂文が交互に垂下する。地文は縦位の燃糸文である。底径13.2cm、現存高11.8cmを測る。

9は深鉢で、口縁部から胴下半部にかけて残存する。全体のプロポーションは曾利系の深鉢のもので、口縁から頸部までの幅が比較的狭く、胴部は中段に膨らみをもつ。

口縁下に平行沈線が巡り、沈線間に刺突列が充填される。胴部と頸部の境を平行沈線で区画し、胴部に平行沈線の懸垂文と蛇行懸垂文が交互に垂下する。蛇行懸垂文は中段に渦巻文が挿入される。

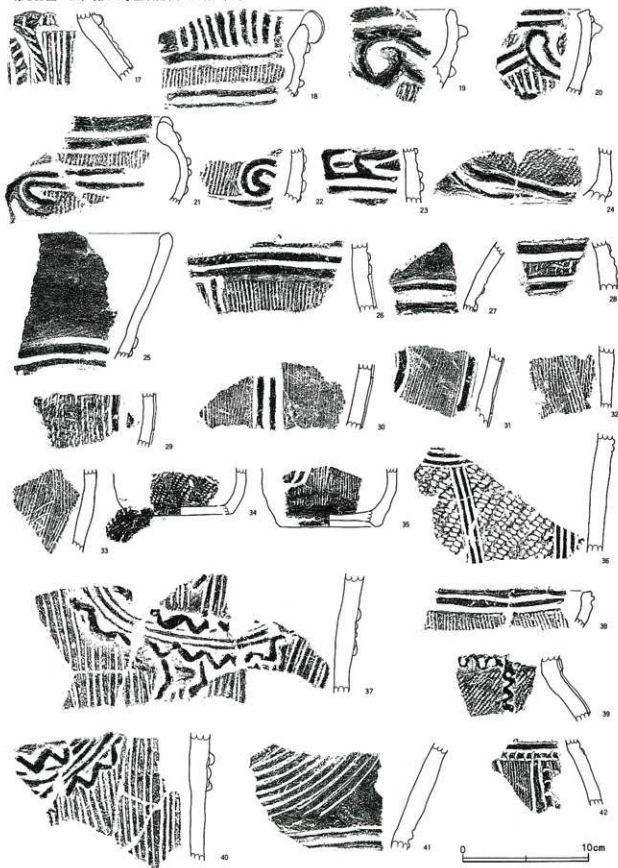
口径推定36cm、現存高30.2cmを測る。

10は小形深鉢で、底部を欠失する。4単位の山尻波状口縁をなし、内面に入り組み状の沈線が巡る。

口縁の波頂部と波底部からそれぞれ三本沈線の懸垂文が垂下する。胴部中段のくびれ部分には横位の波状沈線が巡り、隣り合う懸垂文どうしを連結する。地文はRL単節縦位回転の縄文である。現存高14cmを測る。

11は曾利系の深鉢で、復元最大径67cm近い大型の個体である。口縁から胴下半部にかけての部分と、胴部中段から下半部にかけての部分の2つに分かれて出土したが、ほぼ同一個体と考えられる。口縁部は無文で、口唇内面に隆帯の貼り付けによる稜を形成する。頸部には籠目文が施文され、上下を交互刺突を伴う2条の

第148图 A区第52号住居跡出土土器 (3)



隆帯で区画する。胴部には二本隆帯の渦巻モチーフが描かれる。地文は縦位の燃糸文である。

12は曾利系の深鉢口縁部である。内湾する無文の口縁部で、胴部との境を波状の隆帯によって区画する。地文は縦位の燃糸文である。口径24cm、現存高9.7cmを測る。

13は浅鉢胴部である。胴部中段がくの字に張り出し、この部分に受け口状の隆帯が巡る。胴上半部に文様帯を持ち、胴下半部は無文である。

胴上半部の文様帯は二本隆帯のクランク文であり、モチーフ末端に剣先を伴う渦巻文が位置している。隆帯間および剣先文内部には円形刺突が充填される。地文は棒状工具による縦位の集合沈線である。胴部最大径は50cm近くになるものと思われる。

14は無文の浅鉢である。胴上半部に最大径を持ち、軽微に外反する。

15は器台の肩部である。側壁に貫通孔を持つ。

16は13に類似の浅鉢である。胴上半部に文様帯を持つ。胴部中段の張り出し部分に受け口状の隆帯が巡る。隆帯上には沈線が巡り、一部で渦巻文を構成する。胴下半部は無文である。

17は浅鉢胴上半部の文様帯である。口縁部との境に交互刺突の隆帯が巡り、胴上半部に斜位の刻みを伴う二本隆帯によって弧状の区画が描かれる。地文は棒状工具による縦位の集合沈線である。

18~21はキャリバー類深鉢の口縁部である。18は小波状口縁で、波頂部に縦位の隆帯を連続して貼り付け、蛇腹状の突起を構成する。口縁部文様帯は二本隆帯のクランク文が描かれる。19は二本隆帯の渦巻文、20は繫瓜状のモチーフが描かれる。21は直線的な横S字モチーフである。

22~24はキャリバー類深鉢の口縁部文様帯である。22は21に類似の横S字モチーフである。23は頸部との境を区画する二本隆帯である。24は地文にRL単節縦位回転の縄文が施文される。28は浅鉢胴上半部の文様帯である可能性がある。

25は無文で、直線的に開く口縁部である。26・27は

頸部無文帯と胴部文様帯を区画する隆帯で、胴部に隆帯懸垂文が垂下する。

29~31は隆帯懸垂文の胴部である。32・33は櫛歯状工具の条線が施文される胴部である。

34・35は半裁竹管状工具の蛇行懸垂文が描かれる底部である。35の底面は削り込まれ、上げ底状を呈する。

36は半裁竹管状工具の沈線による渦巻文から同一工具の懸垂文が垂下する。

37・40は曾利系深鉢の胴部である。三本隆帯で曲線モチーフが描かれ、隆帯上面に半裁竹管状工具内面のなぞりが加えられる。両側には波状の浮線文が付けられる。

38は連弧文系深鉢の口縁部である。口端直下に平行沈線が巡り、地文は櫛歯状工具の条線である。41は半裁竹管状工具により重弧文が描かれる口縁部である。地文はみられず、胴部との境は平行沈線により区画される。

39は波状の浮線文によって器面が縦横に分割される。42は半裁竹管状工具による結節沈線によって類似のモチーフが描かれる。

43~45は無文の口縁部である。43は浅鉢、44は12に類似の深鉢であろう。45は無文胴張りの浅鉢で、口唇は著しく肥厚して外屈する。

46は無文地に棒状工具の太い沈線によって渦巻文が描かれる。

47は二本隆帯による繫瓜状のモチーフ、48は13に類似のモチーフで、いずれも浅鉢胴上半部であろう。

49以下は口縁部文様帯の喪失ないし簡素化、磨消し文様の卓越などに特徴づけられる中期末葉の土器群で、覆土中への混入と思われる。

49・50はキャリバー類深鉢の口縁部である。50の口縁部文様帯は扁平な隆帯による楕円形の区画文で、内部に沈線によるなぞりが加えられる。

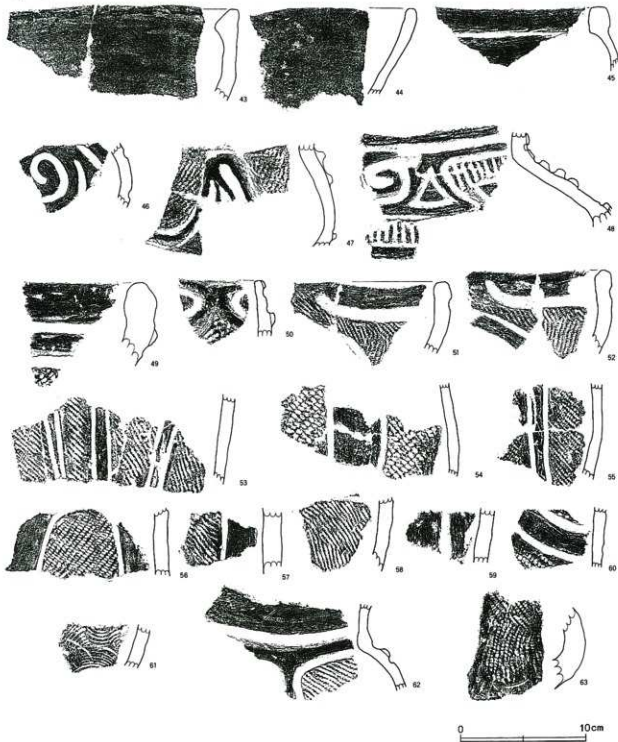
51・52は緩やかな波状口縁である。口縁直下に1条の沈線が巡るが、この沈線は波頂部で途切れて上方へと切れ上がっている。胴部には逆U字状の磨消しモチーフが描かれる。

53~55は磨消し懸垂文の胴部である。56~58は逆U字や楕円形の磨消しモチーフが描かれる。59は沈線のみの懸垂文、60はアルファベット文が描かれる。

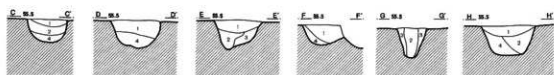
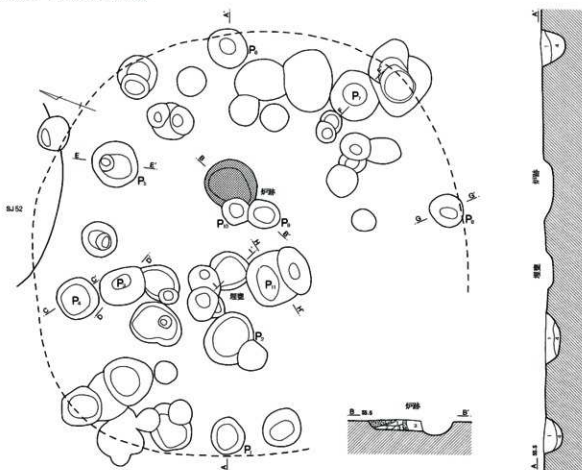
61は櫛歯状工具による波状の条線が描かれる胴部で

ある。62は両耳壺胴上半部の文様帯である。64は両耳壺に伴う橋梁状の把手で、背面にLR単節の縄文が施文される。

第149図 A区第52号住居跡出土土器(4)



第150図 A区第53号住居跡



埋壁



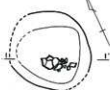
(上面)



(中間)



(下面)



A区S J 53

- 1 褐色土 : ローム粒子や多く含む
- 2 暗褐色土 : ロームブロック・ローム粒子少量含む
- 3 暗褐色土 : ロームブロック多く含む 締まり欠く 人為的埋め戻しか
- 4 暗褐色土 : ローム粒子多量含む

A区S J 53 炉跡

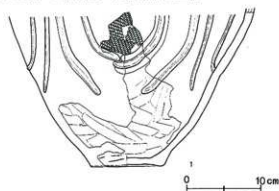
- 1 暗赤褐色土 : ローム粒子少量、焼土粒子多量含む 締まり強
- 2 暗灰黄色土 : 再堆積ローム 全体に成熟、締まり強
- 3 暗灰褐色土 : ローム粒子多量、焼土粒子微量含む 締まりやや強

A区S J 53 埋壁

- 1 暗褐色土 : ロームブロック少量含む 粘性あり、締まりやや欠く



第151図 A区第53号住居跡出土土器



A区第53号住居跡 (第150図・第151図)

F・G・5区に所在する。第52号住居跡と重複しているが、新旧関係は不明である。伊跡を中心とする直径7mほどの範囲にピット群が集中するもので、複数の遺構が切り合っている可能性がある。壁は全く残存せず、壁溝も検出されなかった。

伊跡はピット群の中心からやや北東に寄った地点に位置している。不正楕円形の地床伊で、長径90cm、短径75cm、深さ15cmを測る。

伊跡の南西約1mほどの所で埋甕を検出した。埋甕周囲の堀り方は直径65cmの不整形で、深さ10cmを測る。土器はピット底面から7~8cm浮いた状態で、口縁側を西に傾けて埋設されていたものとみられる。伊跡と埋甕を結ぶ線を住居跡の主軸と仮定した場合、本住居跡の主軸方向はN-71°-Eを指す。

ピットは1m間隔で環状に巡るほか、埋甕周辺にも集中する傾向にある。

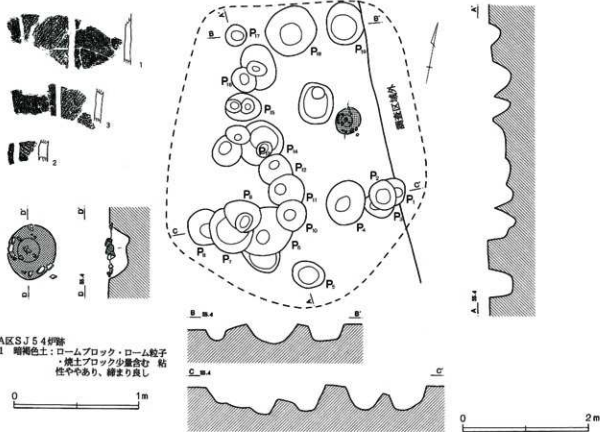
前述の埋甕の他に本住居跡に確実にともなう遺物は出土していない。

出土土器 (第151図)

1は埋甕で、小破片の状態で出土したもののうち深鉢底部から胴下半部にかけての部分が復元された。底部直上に弱いくびれを持ち、胴部中断に向かって内湾しつつ緩やかに立ち上がる。底面は上げ底状を呈する。

胴部文様は微隆起線による玉抱き状の磨消しモチーフで、地文はRL単節の縄文がモチーフに沿って充填される。

第152図 A区第54号住居跡



A区S.J.54伊跡

1 暗褐色土：ロームブロック・ローム粒子
・焼土ブロック少量含む 粘性ややあり、締まり良し

第153図 A区第54号住居跡出土土器



A区第54号住居跡（第152図・第153図）

G-4・5区に所在する。調査区壁近くで炉跡を検出し、その周囲の直径3.5mの範囲で環状にならぶピット群を検出した。ただし、推定される遺構プランの北東部分およそ1/3は調査区域外に外れている。また、環状のピット群の南西にも5～6本のピット（P5～9）が集中して検出された。ピットの深さは30～45cmを測る。

壁は全く残存せず、壁溝も検出されなかった。炉跡はピット群の中央に位置している。楕円形の地床炉で、長径45cm、短径39cm、深さ16cmを測る。炉跡検出面上で土器の大破片が集中して出土している。ほとんどが同一個体に属するものであるが接合せず、炉体土器のような体裁を整えていなかった。本住居跡の炉跡は土器片囲い炉か、あるいは住居の廃絶時に炉体土器を抜き取られた埋燵炉である可能性がある。

前述の炉跡出土土器の他に、本住居跡に確実に伴う遺物は出土していない。

出土土器（第153図）

1～3とも炉跡出土の土器で、深鉢胴部破片である。他にも多数の土器片が出土したが、大半が同一個体であるため、代表的なもの3点のみを掲載する。

1・3は同一個体で、炉跡から出土した土器片のほとんどがこの個体に属するものである。幅広い磨消し懸垂文が垂下する。地文はRL単節の縄文が縦位回転で施文される。

2も磨消し懸垂文の垂下する胴部であるが、地文はLR単節の縄文で、1・3とは別個体である。

A区第55号住居跡（第154図～第160図）

E-3区に所在する。第56号住居跡、第160号土壇を切っており、また、第154号土壇に切られるものと思われる。円形の主体部に長楕円形の張り出し部を伴った柄鏡形の堅穴住居跡で、主体部の直径4.7m、壁厚6cmを測る。主軸方向はN-48.5°-Eを指す。堅緻な床面は検出されず、ローム層の露出を持って床面と半断した。床面はほぼ平坦で、南東から北西に向かって緩やかに傾斜している。

張り出し部は長径2.67m、短径1mの長楕円形の掘り込みで、全体の1/2が主体部プランに掛かっている。遺構検出面からの深さ46cm、主体部床面との高低差40cmを測る。

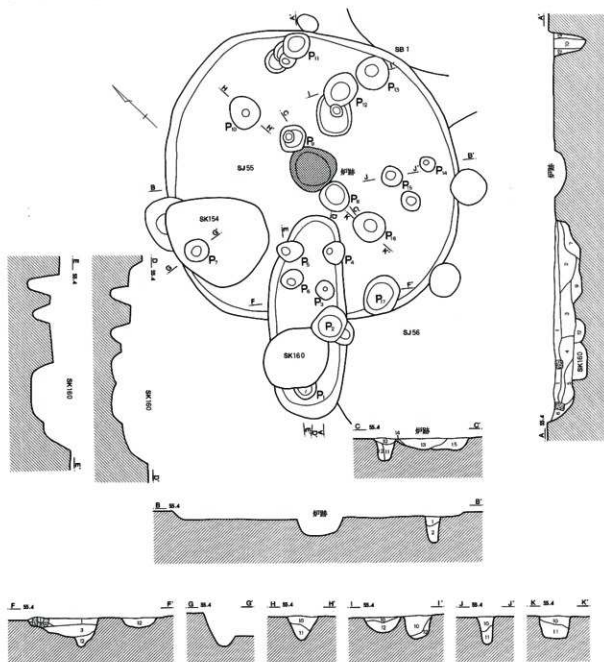
床面上から多数のピットが検出されているが、主体部壁のラインに沿って並ぶP7・11・13・14・17などが壁柱穴を構成するものと思われ、その他の床面中央部に密集するものは別個の遺構との切り合いの可能性が高いものと考えられる。

張り出し部底面においても数本のピットが検出されているが、それらのうち主体部との接続部に位置するP4・5、P3・6は主軸線をはさんでそれぞれ対照に配置されている。張り出し先端部におけるピットの配置は土壇との切り合いなどのため明かでない。

炉跡は主体部中央に位置している。不整形の地床炉であり、直径70cm、深さ18cmを測る。炉石・炉体土器などは検出されていない。また、本住居跡から埋燵は発見されず、これに代わる石囲いなどの施設も検出されなかった。

本住居跡も第48号住居跡と同様、主体部床面上に周

第154図 A区第55号住居跡

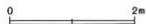


AKS J 55

- 1 黒褐色土：ロームブロック・ローム粒子若干、焼土粒子少量含む
- 2 黒褐色土：ローム粒子若干・焼土粒子微量含む
- 3 暗褐色土：ロームブロックを中々多く含む
- 4 暗褐色土：ロームブロック・ローム粒子を中々多く含む
- 5 暗褐色土：ロームブロック・ローム粒子を若干含む
- 6 黄褐色土：ロームブロックを多く含む
- 7 暗褐色土：ロームブロック・ローム粒子を多く含む
- 8 暗褐色土：ロームブロックを中々多く含む
- 9 暗褐色土：ロームブロックを若干含む
- 10 暗褐色土：ローム粒子を若干含む
- 11 暗褐色土：ロームブロックを多量に含む
- 12 黒褐色土：ロームブロックを若干含む

AKS J 55 伊崎

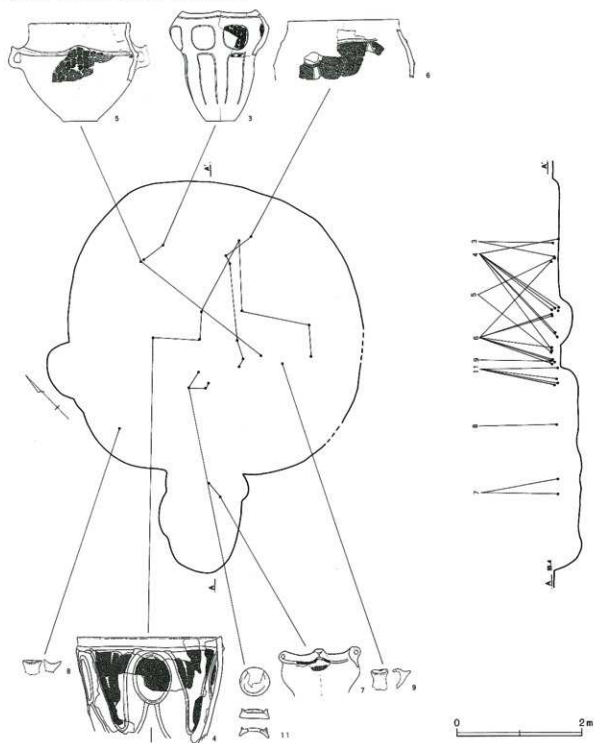
- 13 黒褐色土：ロームブロック・ローム粒子若干、焼土ブロック・焼土粒子中々多く含む
- 14 黒褐色土：ロームブロックを多く含む、焼土粒子若干含む
- 15 暗褐色土：ロームブロックを多く含む



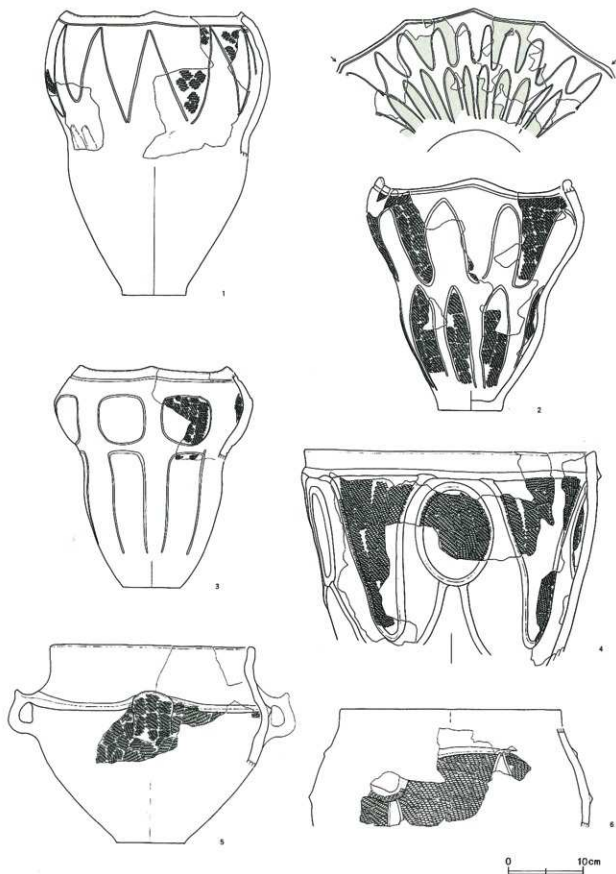
第155图 A区第55号住居跡遺物分布图(1)



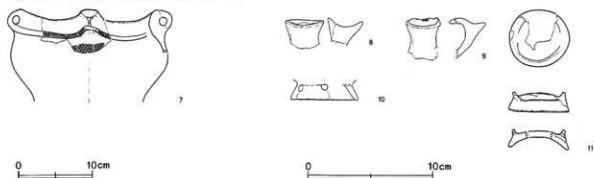
第156图 A区第55号住居跡遺物分布图(2)



第157图 A区第55号住居跡出土土器(1)



第158図 A区第55号住居跡出土土器(2)



礫帯を伴っている。特に北壁から東壁にかけて幅20～40cm程の弧状に、顕著な礫の集積がみられる。礫の出土したレベルは遺構検出面付近に集中している。

遺物は周礫帯の礫に混在する形で出土した。中心は縄文時代中期末葉から後期初頭の土器片である。

出土土器(第157図～第160図)

1は深鉢口縁部から胴部中段にかけての破片である。4単位の小波状口縁で、口縁直下に1条の沈線が巡る。胴上半部に鋸歯状の沈線が描かれ、内部にLR単節の縄文が充填される。胴部中段には指頭によると思われる縦位のなで調整がみられる。

2は小波状口縁の深鉢で、口縁の大半と胴上半部の一部を欠失している。胴部中段のくびれを境に文様帯が上下に分帯され、胴上半部には大波状の区画が描かれ、この区画から上にLR単節の縄文が充填される。胴下半部には逆U字の沈線が垂下し、内部にLR単節の縄文がやはり充填手法で施文される。

口径約25cm、最大径28.8cm、現存高30.2cmを測る。

3は深鉢口縁部の破片で、4単位の小波状口縁をなす。口縁直下に1条の沈線が巡り、胴上半部には隅丸方形の沈線区画が描かれ、内部にLR単節の縄文が充填される。胴下半部には逆U字の沈線が垂下し、内部に同一原体の縄文が施文される。

4は水平口縁で寸胴の深鉢である。口縁から胴上半部にかけての部分が残存する。断面三角形の隆帯によって文様を描かれる。口縁直下を1条の隆帯によって区画する。胴上半部の文様体は一種の玉抱き文であり、隆帯による円形の区画が描かれ、左右に逆三角形

の隆帯区画が垂下する。地文はLR単節の縄文が充填されるが、隆帯に接する部分では縄文が隆帯側縁に乗り上げる状態である。

5は両耳壺である。肩部に断面三角形の隆帯が巡り、橋梁状の把手が付される。頸部とのつながりは比較的スムーズで、口縁はほぼ垂直に立ち上がる。胴上半部の文様体は存在せず、全面にLR単節の縄文のみが施文される。地文は把手背面にも施文される。

6も両耳壺であると考えられる。頸部下端から肩部・胴上半部にかけての部分が残存する。肩部に断面三角形の隆帯が巡る。胴上半部の区画文はみられないが、肩部の隆帯が部分的に垂下して何らかの磨消しモチーフを描くものと考えられる。胴部には鋸歯状の磨消しモチーフが描かれる。地文はLR単節の縄文で、モチーフに沿って充填施文される。

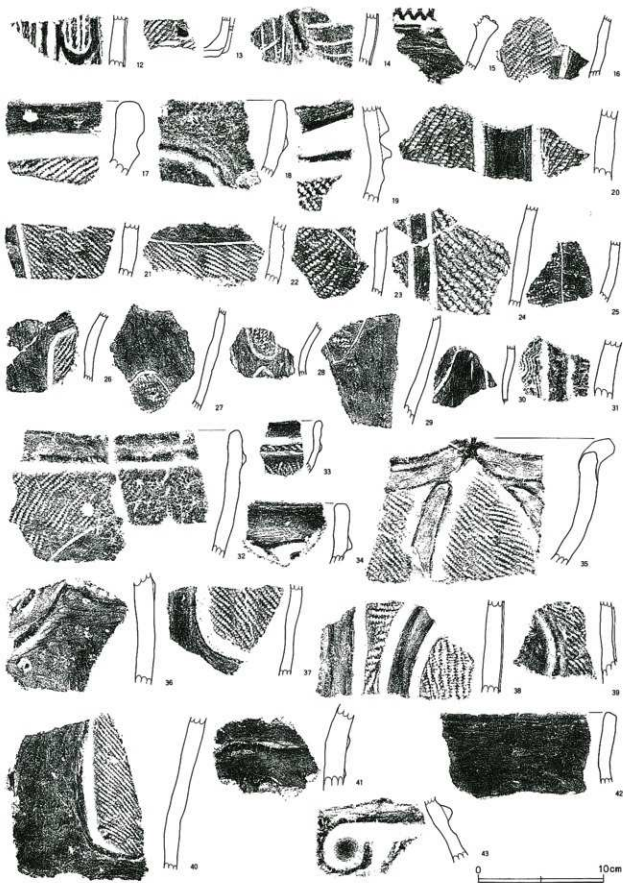
7は小型深鉢口縁部である。内湾する胴上半部から軽微に外反する無文の口縁へと連続する。両者の境は断面三角形の隆帯によって区画される。緩やかな波状口縁をなし、波頂部には環状の把手が付される。地文はLR単節縦位回転の縄文で、隆帯上にも横位回転で施文される。

8・9はさかずき状の突起で、波状口縁の波頂部に付されるものであろう。

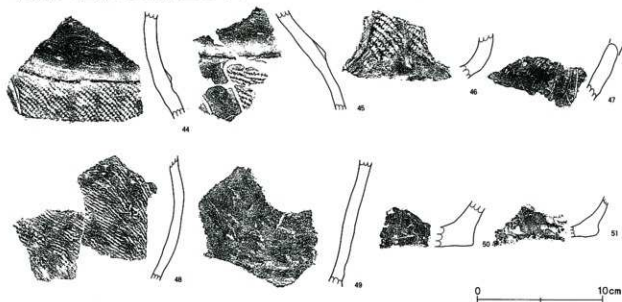
10は台付き深鉢の脚台部である。円形の貫通孔をもつ小型の脚台で、文様は施文されない。

11は土製の蓋である。肩部に断面三角形の隆帯が巡り、これに横位の環状把手が2単位付される。文様は施文されず、彩色もみられない。直径7.8cm、内径6.8

第159图 A区第55号住居跡出土土器(3)



第160図 A区第55号住居跡出土土器(4)



cmを測る。

12~15は覆土中への混入と思われる古相の土器群である。12は地文擦糸文で二本隆帯の懸垂文が描かれる。13は隆帯懸垂文の垂下する底部で、地文はR L単節の縄文で、0段多条である。14は唐草文の土器で、一本隆帯の蛇行懸垂文が垂下し、地文は棒状工具による集合沈線文が施文される。15は浅鉢で、胴部中段に交互刺突を伴う隆帯が巡り、胴下半部は無文となる。

17・18はキャリバー類深鉢の口縁部である。19は口端部を欠失するが同一部位の破片であろう。16・20・21・24・25は磨消し懸垂文の胴部である。24は複節、それ以外は単節縦位回転の縄文を地文とする。31も磨消し懸垂文であるが、地文は櫛歯状工具による波状の条線である。

28~30は鋸歯状ないしU字状の磨消しモチーフが上下に対向する。

32~34は口縁直下に偏平な隆帯が巡る深鉢口縁であ

る。32は逆U字の磨消しモチーフが描かれる。33は隆帯上にも縄文が施文される。35~41は微隆起線により文様が描かれる深鉢である。35は波状口縁で、波頂部につまみ状の突起が形成される。胴部には対弧状のモチーフが描かれ、地文としてL R単節の縄文が充填施文される。38はアルファベット文が描かれる。

42~46は両耳壺と思われる。42は垂直に立ち上がる無文の口縁、43は胴上半部の文様帯で、隆帯による渦巻文が描かれる。44・45は肩部の破片である。比較的变化に乏しい器形で、頸部と胴部の境を断面三角形の隆帯で区画する。胴部には磨消し文様が描かれ、地文はL R単節の縄文が施文される。46は橋梁状の把手である。薄手のつくりで、背面にL R単節の縄文が施文される。48は球胴状に張り出す胴下半部で、比較的緻密な縄文が施文される。49は無文の胴下半部、50・51は底部の破片である。

A区第56号住居跡（第161図～第166図）

E-3・4区に所在する。第55号住居跡に切られる。1軒の不整楕円形の堅穴住居跡として調査したが、複数の遺構の複合である可能性がある。その根拠については後述する。

長径6.2m、短径5m、壁高は残りの良い部分で15cmを測る。堅緻な床面は検出されず、ローム面の露出をもって床面と認定した。床面は凹凸が激しく、壁の立ち上がりも緩やかであり、第144号土壇と切り合う北東部分では壁自体が失われていた。

床面中央から80cm程北西に寄った地点で炉跡を検出した。不整楕円形の地床炉で、長径48cm、短径42cm、深さ10cmを測る。炉跡上面から多量の土器片がまとまって出土した。復元の結果、これは外反する深鉢胴部中段の部分であり、全周にわたって残存することがわかった。

この土器は本来炉体土器として機能していたもので、深鉢胴部中段を正位に埋設したと思われる。土器は床面と考えたローム面から約7～8cm上に浮いた状態で出土している。

この炉跡の南東方向に2基の埋甕を検出した。1基は炉跡から1m程離れた床面中央部、もう1基は炉跡と前述埋甕の延長線上の壁際で検出した。前者を埋甕2、後者を埋甕1と命名する。

埋甕1は両耳壺を正位に埋設したものである。土器内部には十数cm大の礫1点が落ち込んでおり、遺物は出土していない。土器の外部に接して1点の礫が置かれており、土器内部の礫も本来こうした状態で敷設されていたものかもしれない。土器口縁部と礫の上端のレベルは現床面上10～12cmで、本住居跡の遺構検出面と等しい。

土器の下面から土器埋設のための掘り方を検出した。直径45cm、深さ8cmの不整円形のピットである。底面は平坦で、土器は底部をピット底面に接する状態で埋設されていた。

埋甕2は口縁の一部と、胴部中段から下を欠いた深鉢を逆位に埋設したものである。内部から石鏝4点（第

286図44～47）と若干のフレーク類が出土した。埋甕の開口部を囲うようにして径10～20cmほどの礫が敷設される。これらの礫の上端と土器の開口部とはほぼ同一平面状にそろっており、床面上10～12cm、やはり本住居跡の遺構検出面のレベルに相当する。

土器の下面から土器埋設のための掘り方を検出した。長径64cm、短径54cmの楕円形で、深さは16cmを測る。ピットの壁は垂直に近い角度で立ち上がり、底面は起伏に富んでいる。土器は口縁部をピット底面に接する状態で逆位に埋設されていた。

これら2基の埋甕のほか、炉跡から西に1.2m程離れた地点で深鉢口縁部の大破片が逆位で出土した。これを本住居跡に伴う施設と考え、埋甕3と命名した。ただし、土器は現床面に口縁部を接した状態で出土しており、「埋設」のための掘り方は確認できなかった。周囲に礫を伴ってはならず、また土器内部からの遺物の出土もみられなかった。

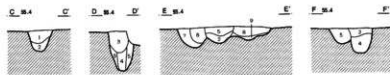
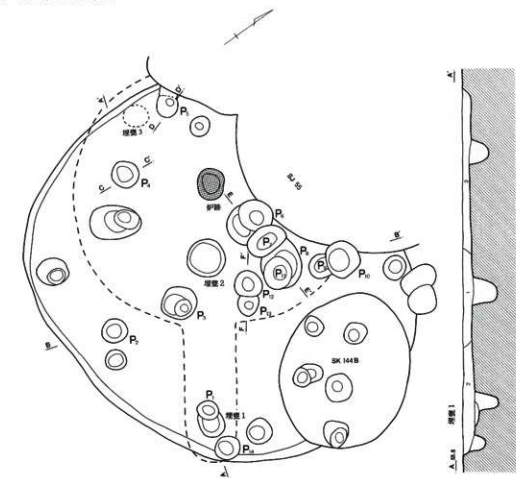
さて、本住居跡は冒頭述べた通り楕円形プランの単独の堅穴住居跡として調査され、上記の炉跡・埋甕類についてもこの住居跡に伴うものとして記録されたものである。しかし、前述したような炉跡と3基の埋甕（うち1基は掘り方を持たないようだが）の位置的・距離的な関係は、…唯一埋甕3とした復元個体の出土地点が炉跡を挟んで正反対に位置していることを別にすれば…本遺跡A区第48号住居跡や後出D区におけるそれと一致している。

炉跡や埋甕の検出面が床面よりも10cm余りに位置している事実からみても、本住居跡の遺構検出面付近を生活面とする軒鏡型の住居跡が存在したことは間違いない。本住居跡は2軒の住居跡の複合である可能性が高い。

埋甕1は張り出し部先端の埋甕、埋甕2は主体部と張り出し部の接続部分に位置するものであろう。埋甕3については周縁帯のなかにはしばしば見られる復元個体で、必ずしも「埋甕」の体裁を持ってはいなかったかもしれない。

炉跡中心部から埋甕1の先端＝張り出し部先端まで

第161图 A区第56号住居跡

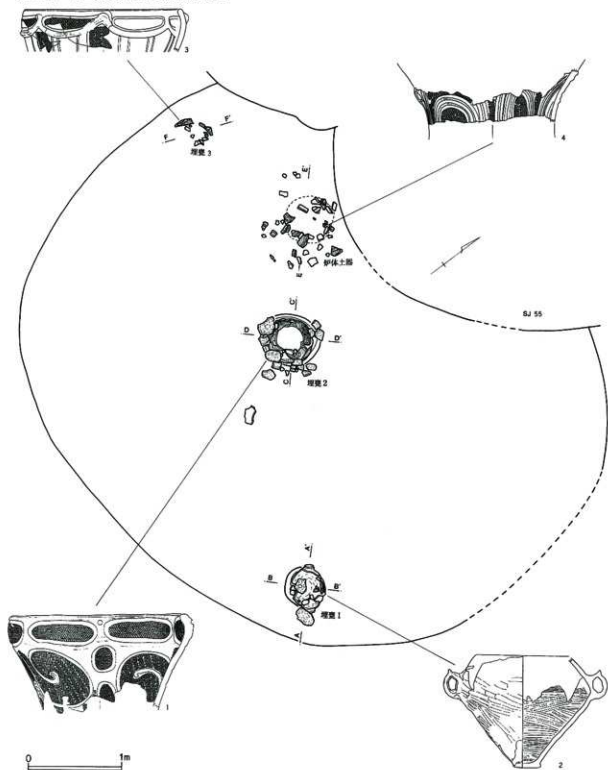


AKS J 56

- 1 黒褐色土：ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量含む 締まり強
- 2 暗褐色土：ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量含む 締まり強
- 3 暗褐色土：ローム粒子若干含む
- 4 黒褐色土：ローム粒子・焼土粒子微量含む
- 5 暗褐色土：ロームブロックを多く含む
- 6 黒褐色土：ローム粒子を微量含む
- 7 暗褐色土：ロームブロックをやや多く含む
- 8 黒褐色土：ローム粒子若干含む
- 9 黒褐色土：ロームブロックを多く含む



第162図 A区第56号住居跡遺物分布図

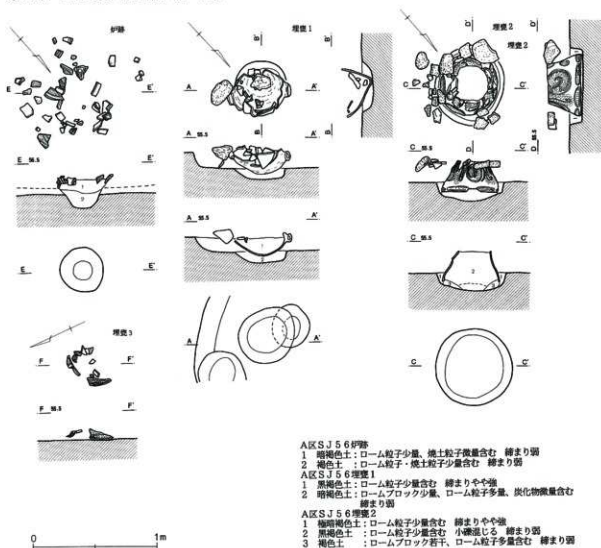


の距離は約4.2m+α、これを住居跡主体部の直径とほぼ等しいものと仮定するならば、本住居跡上面には主体部直径約4.2m強、張り出し部を含めた全長約6.3m余り、主軸方向はN-54.5°-Eを指す、連接部の埋蔵

が若干内側に寄る以外は、中期末葉のものとしては標準的な規模と構成を持った柄鏡型の住居跡が存在したと思われる。

遺物は中期末葉の土器が出土している。

第163図 A区第56号住居跡炉跡・埋壺



A区S J 56炉跡

1 暗褐色土：ローム粒子少量、焼土粒子微量含む 締まり弱

2 褐色土：ローム粒子・焼土粒子少量含む 締まり弱

A区S J 56埋壺1

1 暗褐色土：ローム粒子少量含む 締まりや中強

2 暗褐色土：ロームブロック少量、ローム粒子多量、炭化物微量含む 締まり弱

A区S J 56埋壺2

1 暗褐色土：ローム粒子少量含む 締まりや中強

2 暗褐色土：ローム粒子少量含む 小強含む 締まり弱

3 褐色土：ロームブロック若干、ローム粒子多量含む 締まり弱

出土土器 (第164図～第166図)

1は埋壺2である。キャリパー類深鉢で、胴部中段を欠失する。

口縁部文様帯は渦巻き文を喪失して楕円形区画へと変化し、頸部との境界は軽微な段を残すのみで非常に曖昧である。楕円文の接点には指頭によると思われる円形の刺突が一配される。

胴部文様帯は唐草文に由来するもので、渦巻・横S字・わらび手などのモチーフが幅広の沈線によって描かれる。モチーフの末端は隆起してひれ状の突起を形成する。モチーフの余白には特に区画を設けずに縄文が施文されるほか、楕円形の区画文が挿入される。

地文はR L単節の充填縄文であるが、1面のみR L

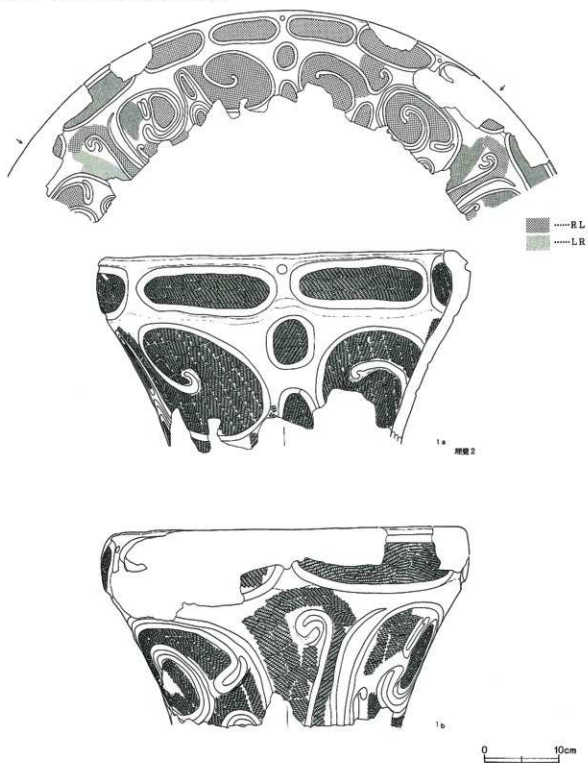
単節の縄文を忍び込ませている。口径46cm、現存高25.2cmを測る。

2は埋壺1である。無文の両耳壺で、口縁および胴上半部の一部を欠失する。底部から胴部中段にかけて直線的に開く。肩部がくの字に張り出し、ここに橋梁状の把手一対が付される。口縁は失われているが、外反して垂直に立ち上がる一般的な口縁ではなく、内傾したままの状態で終息する可能性が高い。

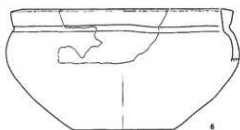
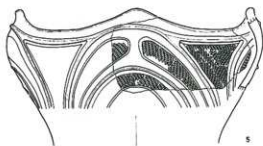
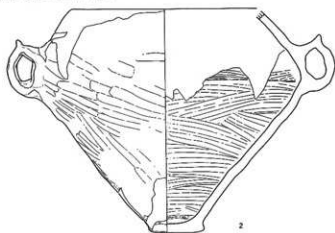
文様は施文されず、外面胴上半部には篋状工具により、斜位の削りないし、ごく荒々しいなで椽の器面調整が施される。胴下半部では縦位の研磨がみられる。内面には篋状工具による研磨が徹底される。

把手部分を除いた最大径43.5cm、底径7.2cm、現存

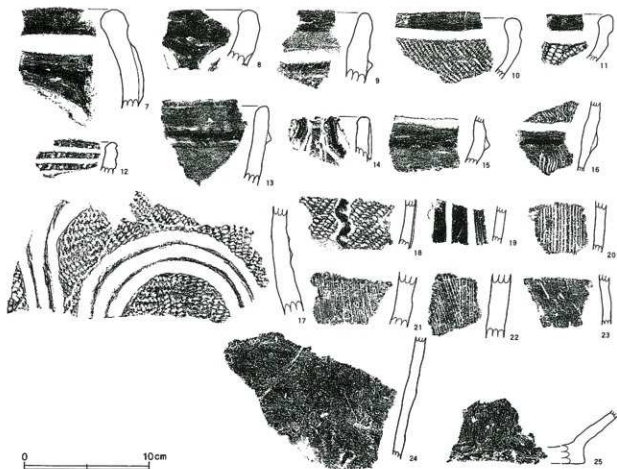
第164图 A区第56号住居跡出土土器(1)



第165图 A区第56号住居跡出土土器(2)



第166図 A区第56号住居跡出土土器(3)



高34.5cmを測る。

3は埋甕3で、キャリバー類深鉢の口縁から胴上半部である。口縁部文様帯は形骸化した繋弧文というべきものである。弧状モチーフが切り合う部分は小突起状に張り出すが、渦巻き文は省略される。胴部には磨消し懸垂文が垂下する。地文はRL単節の縄文で、口縁部は横位回転、胴部では縦位回転で施文される。

4は炉体土器で、外反する深鉢胴部中段である。口縁部文様帯を持つキャリバー類の深鉢であると思われる。両側になぞりを加えた二本隆帯によって大柄の渦巻き文が描かれるもので、隆帯主導ではあるが文様構成上は1の個体に類似する。モチーフ末端がひれ状に隆起する特徴も共通している。地文はRL単節の縄文が施文される。最大径46cm、現存高12.7cmを測る。

5は壺山類深鉢の口縁部である。波状口縁をなし、断面三角形の隆帯によって大柄の渦巻き文が描かれ

る。地文はRL単節の縄文が充填手法で描かれる。

6は無文胴廻りの浅鉢で、口縁部から胴上半部にかけて残存する。口唇は肥厚して屈曲し、内湾する胴部から垂直に立ち上がる。この浅鉢については古い特徴を有しており、覆土中への混入の可能性がある。

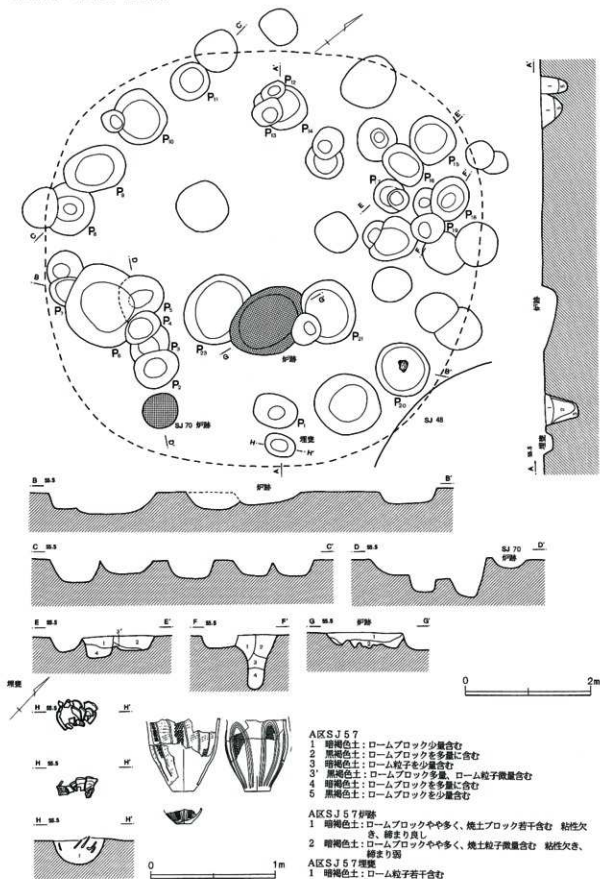
7～9は隆帯+沈線によって渦巻き文が描かれるキャリバー類深鉢の口縁部である。10・11は口縁直下に1条の沈線が巡るもので、形骸化した口縁部文様帯である。

12は連弧文系の深鉢口縁部である口端直下に棒状工具の平行沈線が巡り、地文はRL単節縦位回転の縄文が施文される。

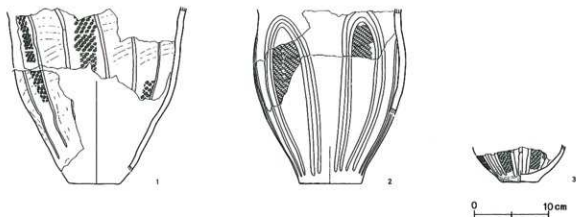
13は口縁直下に断面三角形の隆帯が巡る。14は曾利系の深鉢で、口縁下に弧状の隆帯区画が配され、区画接点から平行沈線の懸垂文が垂下する。

16・17は両耳壺胴部中段の隆帯区画である。17は二

第167図 A区第57号住居跡



第168図 A区第57号住居跡出土土器



本隆帯の大柄な渦巻き文の描かれる胴部である。18は交互刺突を伴う小波状の隆帯懸垂文、19は磨消し懸垂文である。20～23は条線のみ施文される胴部破片、24・25は底部付近の破片である。

A区第57号住居跡（第167図・第168図）

F-4区に所在する。第70・85号住居跡と重複関係にあるが、これらとの新旧関係は不明である。直径7mほどの環状の範囲に大小のピット群が集中するもので、壁・壁溝などは一切検出されていない。このため、本住居跡の正確な規模・平面形などは一切不明である。

伊跡はピット群の中央からやや南西に寄った地点で検出された。楕円形の地床炉で、長径1.3m、短径1.07m、深さ20cmを測る。

伊跡の南西1.3mの地点に埋甕が存在する。直径40cm、深さ20cmの不整形円形のピット中に3個体分の土器の大破片が折り重なった状態で埋設されるもので、土器の残存状態は必ずしも良くない。土器は丸底状のピットの底面から10cm余り浮いた状態で出土している。

前述の3個体の埋設土器以外に、本住居跡に確実に伴う遺物は出土していない。埋設土器の時期は縄文時代中期末葉である。

出土土器（第168図）

前述のとおり本住居跡の埋甕は土器の大破片が折り重なった状態で発見されたものであり、復元の結果3

個体の土器の存在が明らかとなった。ピット中からは図化した以外にも若干の土器片が出土したが、接合しなかった。

1は深鉢で、胴部中段から底部の直上までが断片的に復元された。沈線による磨消し懸垂文が垂下し、R・L R 複節の粗雑な縄文が縦位回転で施文される。薄手かつ硬質の器壁である。

2も深鉢で、胴部中段から下半部にかけての部分が復元し得た。二本沈線による逆U字状の区画が描かれ、内部にL・R 単節の縄文が縦位回転で施文される。

3は深鉢胴下半部から底部にかけての部分である。底部直上で内湾しつつ開く球脚状の器形で、小型の壺や両耳壺など特殊な器種に属するものであるかも知れない。三本沈線の磨消し懸垂文が垂下し、地文はR・L 縦位回転の縄文である。底径4.8cmを測る。

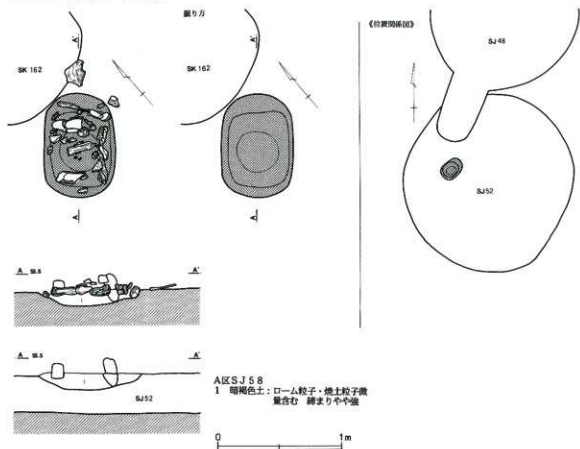
A区第58号住居跡（第169図・第170図）

F-4区に所在する。第52号住居跡の覆土上に位置するものでこれより新しく、第161・162・163号土壌よりも新しい。また位置関係からいって第48号住居跡とも重複関係にあるものと思われるが、新旧関係は明かでない。第52号住居跡床面と本住居跡伊跡の掘り込み面のレベル差は31cmである。

検出されたのは伊跡のみであり、壁・壁溝・ピットなどは発見されなかった。従って本住居跡の規模・平面形・主軸方向等は一切不明である。

伊跡の形態が第48号住居跡など中期末葉の柄鏡形住

第169図 A区第58号住居跡



居跡のものに類似していることから、本住居跡も柄鏡形の住居跡であった可能性が高いが、この炉跡に対応する埋戻らしきものは検出されなかった。

炉跡は方形の石囲炉で、長径64cm、短径49cm、深さ13cmを測る。炉石の石材は石皿の転用をも含む結晶片岩系の板石と、偏平な河原石が混在する。炉石埋設のための掘り方は長径8.2cm、短径5.7cmの楕円形である。

遺物は炉跡覆土中から縄文時代中期後葉および末葉の土器片が少量出土している。ただし前者については

第52号住居跡の遺物が混入している可能性がある。

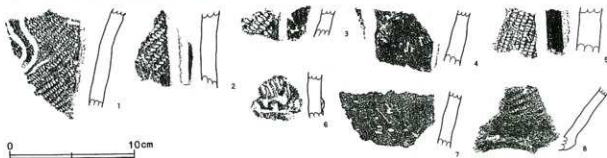
出土土器 (第170図)

1は半裁竹管状工具の平行沈線による蛇行懸垂文が垂下する胴部である。地文はRL単節縦位回転の縄文である。

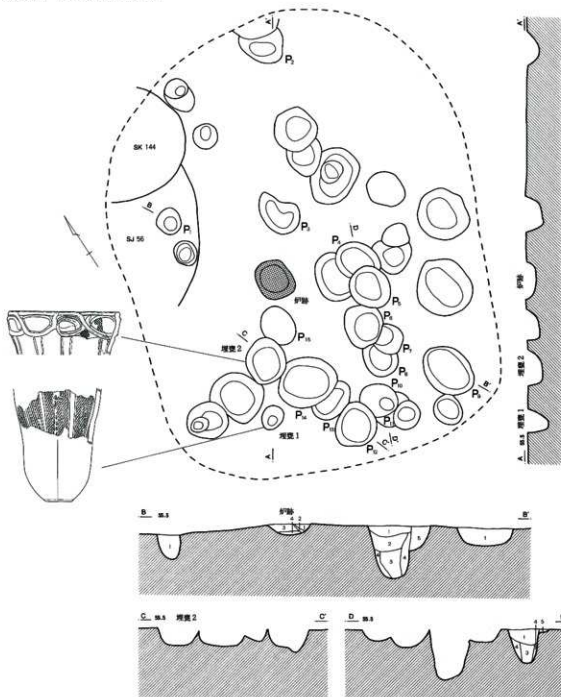
2～5は磨消し懸垂文の胴部である。地文はすべてRL単節の縄文である。

6は曾利系の深鉢頸部である。交互刺突を伴う隆帯が巡り、地文は半裁竹管状工具による縦位の集合沈線

第170図 A区第58号住居跡出土土器



第171図 A区第59号住居跡



A区S J 59

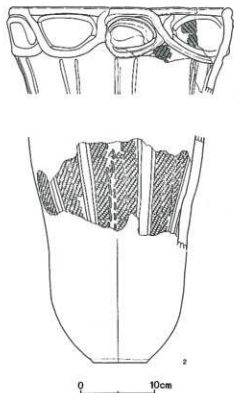
- 1 暗褐色土：ローム粒子微量含む やや粘性あり、締まり良し
- 2 暗褐色土：ロームブロック少量含む 粘性強
- 3 暗褐色土：ローム粒子微量含む 粘性強
- 4 暗褐色土：ローム粒子多く含む やや粘性あり、締まり良し
- 5 暗褐色土：ローム粒子やや多く含む

A区S J 59 P跡

- 1 淡赤褐色土：ローム粒子・焼土粒子少量、炭化物微量含む
- 2 黒灰褐色土：灰・炭化物多量を含む 締まり弱
- 3 暗赤褐色土：ローム粒子・焼土ブロック少量、焼土粒子多量、炭化物微量含む 締まり弱
- 4 暗灰褐色土：ローム粒子多量に含み、若干の灰を含む 締まりやや強



第172図 A区第59号住居跡出土土器



である。

7は無文の胴部である。8は両耳壺の底部と思われるもので、R L単節の縄文が縦位回転で施文される。

A区第59号住居跡（第171図・第172図）

E-3・4、F-3・4区に所在する。第56号住居跡、第144号土壇と重複関係にあるが、これらとの新旧関係は不明である。長径7m、短径5.3mの範囲に炉跡と2基の埋壺、さらに大小のビット群が集中するものである。壁・壁溝等は一切検出されなかった。従って本住居跡の規模・平面形は不明である。

炉跡はビット群の中央やや南西寄りに位置している。隅丸長方形の地床炉で、長径60cm、短径55cm、深さ17cmを測る。

炉跡の南西で2基の埋壺を検出した。炉跡からみてほぼ同一線上に2基が並ぶ。炉跡から遠い南西側のものを埋壺1、炉跡寄りのものを埋壺2と命名した。

埋壺1は炉跡の中心から南西に2.3m離れた地点に位置している。トレンチャーによる破壊を被っている

が、キャリバー類深鉢胴部上段から中段にかけての部分が正位に埋設されたものと思われる。掘り方は不整形円形のビットで、直径36cm、深さ32cmを測る。

埋壺2はトレンチャーによる攪乱が著しく、埋設土器もほとんど小破片の集積といった状態で検出された。口縁部から胴上半部にかけてのごく一部が復元できたにすぎない。掘り方は楕円形のビットで、長径74cm、短径60cm、深さ20cmを測る。

炉跡と2基の埋壺を結ぶ線を本住居跡の主軸線と仮定するなら、N-33.5°-Eを指す。

ビットは主軸線の南東側では密に、北西側では疎らに検出された。配置に規則性は認められず、またビットの間隔が密に過ぎるようでもあり、複数の遺構の切り合ひである可能性がある。

埋壺をはさんで対照に、ハの字形に配置される一群が認められ、入り口付近の対ビットにあたるものと考えられる。

前述の埋壺の他に、本住居跡に伴う遺物は出土していない。埋壺の時期は縄文時代中期後葉から末葉と考えられる。

出土土器（第172図）

1は埋壺2である。キャリバー類深鉢口縁部から胴上半部にかけての破片である。

口縁部に波状の隆帯が巡り、上下に隆帯+沈線による楕円形の区画文が配される。胴部には磨消し懸垂文が垂下する。

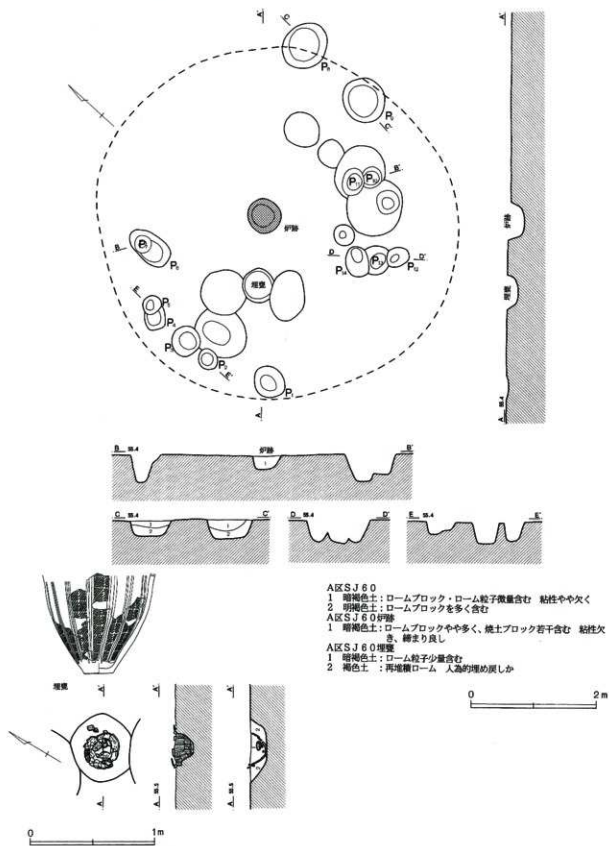
地文はR L単節の縄文で、口縁部では横位、胴部では縦位回転で施文される。

2は埋壺1である。キャリバー類深鉢胴部上段から中段にかけて残存する。寸耐で器形の変化に乏しく、胴部中段にごく弱いくびれを持つ。

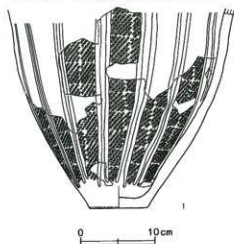
全面に幅の狭い磨消し懸垂文が垂下する。地文はR L単節の縄文で、縦位回転で施文される。所々にみられる結束回転文は、縄文原体の末端処理の結び目があらわれたものであろう。

復元最大径28.2cm、現存高15.6cmを測る。

第173図 A区第60号住居跡



第174図 A区第60号住居跡出土土器



A区第60号住居跡 (第173図・第174図)

F-3・4、G-3・4区に所在する。第72・85号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。

炉跡を中心とする直径5.7mの範囲に大小のピットが集中する。壁・壁溝は全く検出されていないため、本住居跡の正確な規模・平面形は不明である。

炉跡はピット群のおおむね中央に位置している。地床炉で直径60cmの円形を呈し、炉床までの深さ27cmを測る。

炉跡の南西に埋壘が存在する。炉跡からの距離は約80cmほどである。深鉢胴下半部を正位に埋設したものである。内部には礫1点が落ち込んでいたほか、遺物は出土していない。

埋壘埋設のための掘り方は土器本体より一回り大きな円形のピットで、直径56cm、深さ13cmを測る。土器はこのピットの底面に底部を接する状態で埋設されていた。

炉跡と埋壘を結ぶ線を住居の主軸と仮定するならば、本住居跡の主軸方向はN-51.5°-Eを指す。

ピットは炉跡の東西方向で密に検出され、逆に南北方向には空白が存在する。深さ20~40cmの小規模なものが多く、炉跡西側では住居跡推定線上に弧状の配列がみられ、壁柱穴を構成するものとみられる。

前述の埋壘以外に、本住居跡に伴う遺物は出土していない。埋壘の時期は縄文時代中期末葉であると考えられる。

出土土器 (第174図)

1は埋壘である。胴部中段から上を欠失するが、口縁部文様帯を有するキャリバー類の深鉢であると思われる。胴部中段に弱いくびれを持ち、胴下半部は緩やかなカーブを描いて収束し、底部に至る。

幅の狭い二本沈線の磨消し懸垂文が垂下する。地文はRLR複節縦位回転の縄文である。

現存する胴体部分の最大径が30cmであるのに対し底径は8cmに満たない。土器全体のサイズに比較して非常に小さな底部であるといえる。現存高は26.8cmを測る。

A区第61・63号住居跡 (第175図~第177図)

C・D-2区に所在する。2軒が重複して検出され、第61号が第63号を切る状態であった。また、両者とも北半部分が調査区域外に掛かっている。

第61号住居跡は全体のほぼ1/3程が調査されたものと思われる。A区第7号住居跡に類似する小型円形三本主柱の竪穴住居跡であるとみられ、大きく見積もっても直径4mを超えないものと思われる。壁高は約30cmを測る。床面は平坦で、東に向かって緩やかに傾斜している。

壁溝は調査された範囲で全周し、重複はみられない。炉跡は検出されず、調査区域外に位置しているものと思われる。

住居跡南南東部において埋壘を検出した。壁溝の内側に接して設けられており、口端部と底部を欠失する深鉢を正位で埋設したものである。土器埋設のための掘り方は土器本体より一回り大きな不整形のピットで、別個のピット(P2)を切っている。直径30cm、深さ30cmを測る。埋壘はピット底面から若干浮いて、口縁部をわずかに床面に露出した状態で埋設されていたものと思われる。

床面上から3本のピットを検出した。P2は前述のように埋壘の掘り方に切られており、出入り口の施設に伴うピットであると思われる。壁溝の外に接するP1もこれに類するものであろう。

P3は炉跡と埋壘の間に、住居跡主軸線をはさんで

対峙する一対のピットの片方であると考えられる。

前述の埋塞以外に、覆土中から少量の遺物が出土している。大半が縄文時代中期後葉から末葉に属する土器の小破片である。

第63号住居跡は第61号住居跡の南西で検出された。大半が調査区域外に存在するため、規模・平面形・主軸方向等全て不明である。

壁高は残りの良い部分でも17cm、壁の立ち上がりは明確でない。床面は起伏に富んでいる。壁溝は検出されなかった。

炉跡は検出されず、調査区域外に位置している可能性がある。P1～3が第61号住居跡に属するものであるとするなら、本住居跡に属するピットは検出されていない。

本住居跡に伴う遺物は出土していない。

出土土器 (第176図・第177図)

全て第61号住居跡に属する遺物である。

1は埋塞である。口唇部と底部を欠失する深鉢で、

第175図 A区第61・63号住居跡

口縁内湾し、胴部中段に弱いくびれを持つ。

逆U字状の沈線区画内部にRL単筋の縄文が充填され、隣り合う区画どうしの間に口縁から底部まで一貫した磨消し懸垂文を形成する。

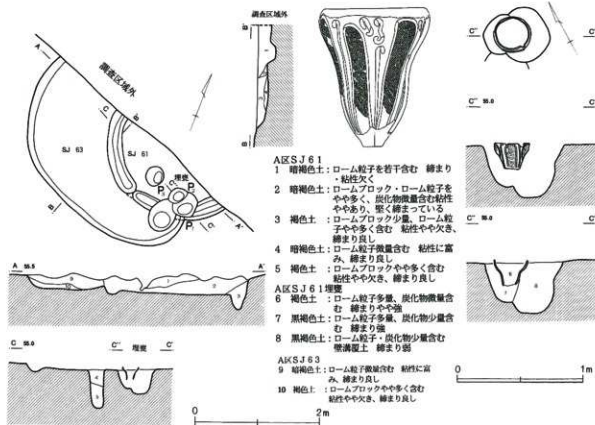
懸垂文の中央にはわらび手状の沈線が垂下し、一部口縁直下に両端閉塞する3の字状の小わらび手モチーフが描かれる。

最大径29.5cm、現存高31.3cmを測る。

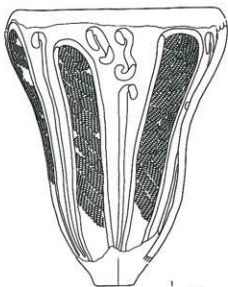
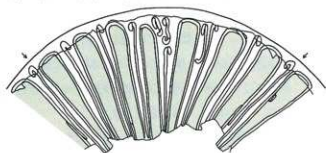
2は器台である。無文で、篋状工具による横位の荒いなで調整が観察され、胴部中段に貫通孔を持つ。下方に向かって軽微に開き、接地部分は内湾する。

3は棒状工具による渦巻文が施文される胴部である。4はキャリアー類深鉢の頸部無文帯で、胴部との境を1条の縞帯で区画する。

5は微隆起線による楕円形の区画内部に縄文が充填施文される。椀山類深鉢か、ひさご形土器の胴部中段であろう。6は横位の微隆起線から下に掛歯状工具の糸線が施文される。両耳壺胴上半部の文様帯下端の部



第176図 A区第61号住居跡出土土器(1)



1 複製



分であろう。

7・8は横位の平行沈線で器面を上下に分帯するもので、連弧文系の土器であろう。9は地文縄文上に縦位の平行沈線が垂下する。10は横位の磨消しモチーフ

が描かれる。

11は縄文のみの破片である。12は半裁竹管状工具による縦位の条線が施文される。

第177図 A区第61号住居跡出土土器(2)



A区第62号住居跡(第178図～第181図)

B・C-3区に所在する。第180号土塊を切っている。床面の大部分をトレンチャーによる攪乱で破壊されている。

長径5.2m、短径4.5mの楕円形の堅穴住居跡で、主軸方向はN-40.5°-Eを指す。壁高は最も残りの良い北東壁で22cmを測る。床面はほぼ平坦である。

壁溝は壁から20～50cm内側を巡る。北部と南西部に空白が存在し、重複はみられない。壁の直下には壁溝が巡らないが、壁と壁溝の間にもピットが分布しており、拡張か切り合いによる新旧関係が存在する可能性がある。

伊跡は検出されなかったが、これは床面中央を横断する攪乱によって破壊された可能性が高い。

主軸線上やや南西寄りでは埋篋が検出された。口縁状の突起と胴下半部を欠失した深鉢を正位に埋設したものである。土器は全体の半分以上を床面上に露出した状態であった。

土器埋設の掘り方は土器本体より一回り大きな円形のピットである。直径32cm、深さ8cmで、底面平坦である。土器は破断した下端部をピット底部からわずかに浮かせた状態で埋設されていた。

床面上および壁際から7本のピットが検出された。規模からみて、P1・2・3が本住居跡に伴う柱穴であると思われる。プランの大半が失われているため明証を欠くが、壁柱穴を構成するものと考えられる。

本住居跡からは前述の埋篋のほかに縄文時代中期後葉から末葉の土器が出土している。攪乱中から出土した破片も含まれ、时期的なまとまりに欠ける。

出土土器(第179図～第181図)

1は埋篋である。キャリバー類の深鉢で、胴下半部を欠失し、口縁の突起がおそらくは故意に取り除かれている。

4単位の小波状口縁で、波頂部に山形の突起が付される。突起は1カ所で双頭状であり、他は単独の突起である。口縁部文様帯はなぞりを加えた扁平な隆帯で、入り組み構成の渦巻モチーフが描かれる。胴部には磨

消し懸垂文が垂下する。地文はLR単節の縄文で、口縁部・胴部を問わず縦位回転で施文される。

2はキャリバー類深鉢の頸部から胴上半部である。頸部無文帯を持ち、胴部との境を二本隆帯で区画する。胴部には二本隆帯の懸垂文と蛇行懸垂文が交互に垂下する。地文はRL単節の縄文である。

3は小型の深鉢で、胴部から口縁にかけて直線的に開くコップ形土器である。

櫛歯状工具による縦位の条線が全面に施文され、口縁直下に半截竹管状工具の平行沈線が2段巡らされる。

4～7は勝飯式の流れをくむ土器である。4は半截竹管状工具背面を用いたキャタピラ文が2段に施文され、間に同一工具の末端による半円形の刺突文が並ぶ。

5は深鉢頸部から胴上半部の破片である。頸部にくびれを持ち、刻みを伴う隆帯が巡る。胴上半部には同様の隆帯によって渦巻文が描かれる。

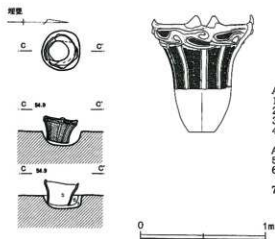
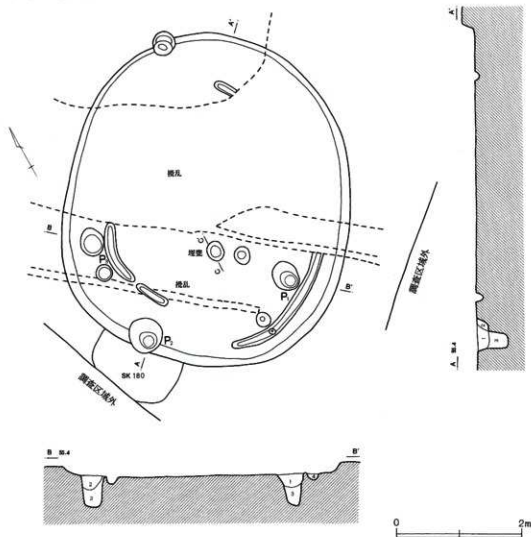
6は刻みを伴う断面台形の隆帯が2条平行して垂下し、両側には交互刺突を伴う平行沈線により曲線モチーフが展開する。7は無文地に平行沈線が走り、これに直交するY字状の沈線によってパネル状の区画が構成される。

8は山形の板状突起で、中央に貫通孔を有する。キャリバー類深鉢の口縁上に付されるもので、中空把手の一部を構成するものであろう。

9～22はキャリバー類深鉢の口縁部およびこれに付随する文様帯の一部である。二本隆帯による渦巻文等が描かれる。口唇の残存しないものについては同種の文様が描かれる浅鉢胴上半部の破片が混じっている可能性もある。23は文様帯下端を区画する隆帯で、頸部無文帯が存在する。24・25は口縁直下に隆帯による楕円形の区画が描かれ、内部に縦位の集合沈線が充填される。

26～32はキャリバー類深鉢の口縁部であるが、前出のものより新しく、胴部に磨消し懸垂文を伴う時期のものである。27・28は波状口縁、26・32等は水平口縁である。33はほぼ同時期のもので、口端上に台形の突

第178図 A区第62号住居跡

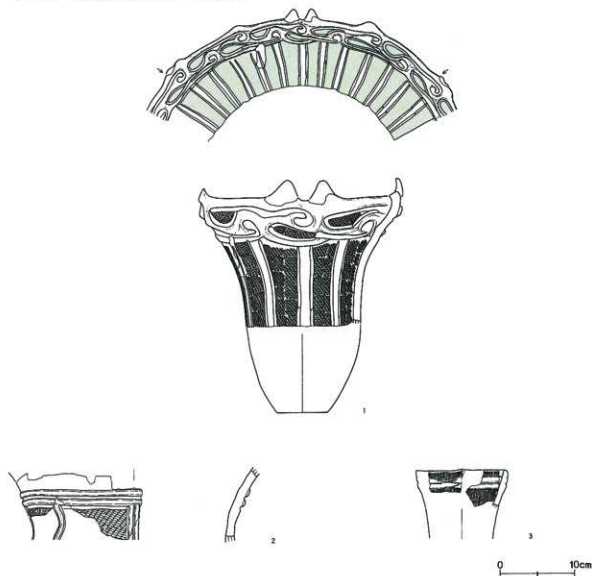


A区S J 62

- 1 黒褐色土：ローム粒子やや多く、炭化物微量含む 締まり強
- 2 黒褐色土：ローム粒子多く、炭化物微量含む 締まり強
- 3 暗褐色土：ローム粒子多く含む、炭化物微量含む 締まりやや強
- 4 褐色土：ロームブロック若干、ローム粒子多く含む 人為的の戻しか締まり強

A区S J 62埋篋

- 5 黒褐色土：ローム粒子少量、炭化物微量含む 締まり強
- 6 暗褐色土：ロームブロック・ローム粒子若干、炭化物微量含む 締まり強
- 7 褐色土：ロームブロック・ローム粒子多く含む 締まり強



起が付され、棒状工具先端の刺突が乱打される。36～40は無文の口縁部で、大半が浅鉢に伴うものである。

41～43は浅鉢胴上半部の文様帯で、キャリバー類深鉢の口縁部文様帯に由来する。

44～53はキャリバー類深鉢の胴部である。44は隆帯、47・48は半裁竹管状工具の平行沈線、49～51は棒状工具の平行沈線によって懸垂文や蛇行懸垂文が描かれる。52・53は磨消し懸垂文である。54～57は連弧文系の深鉢胴部であろう。

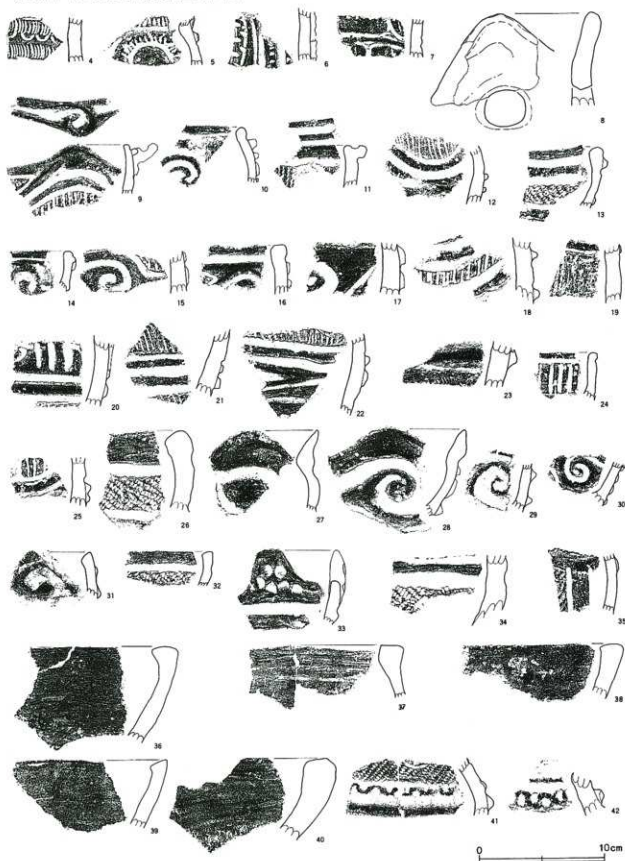
58は曾利系深鉢の頸部で、ジグザグの浮線文が重畳する。59・60は集合沈線によって樹枝状のモチーフが描かれる。

61は曾利式の流れをくむ隆帯文土器で、指頭押捺を伴う隆帯が器面を縦位に分割する。地文は縦位の集合沈線である。62は縦位の集合沈線のみが施文される胴部である。63は隆帯による繫弧モチーフが描かれ、口縁下に形成された半円状の区画に円形竹管状工具先端の円形刺突が充填される。

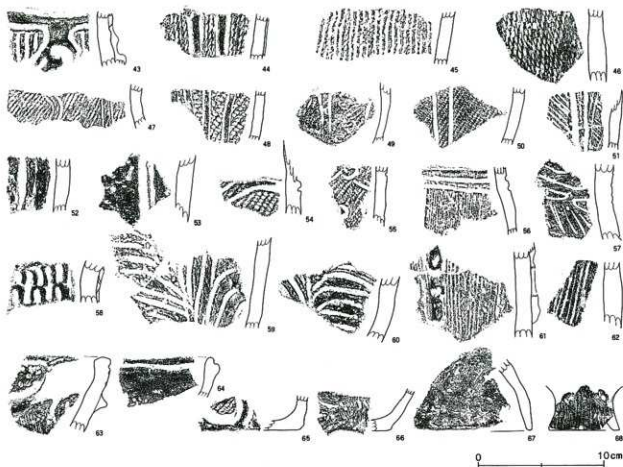
64は口端上に1条の沈線が巡るもので、後期初頭から前葉に属するものかもしれない。

65は隆帯の蛇行懸垂文が垂下する底部で、底部を巡る隆帯がこれに連結する。66は櫛歯状工具の条線が施文される底部である。67・68は台付き土器の脚台部である。

第180图 A区第62号住居跡出土土器(2)



第181図 A区第62号住居跡出土土器(3)



A区第64号住居跡(第182図・第183図)

B・C-2区に所在する。伊跡・埋甕と数本のビットを検出した。

壁は全く残存せず、壁溝も検出されなかった。トレンチャーによる攪乱が床面の広い範囲に及んでいるものとみられ、ビットの検出もままならない状態であり、本住居跡の規模・平面形は不明である。

伊跡は埋甕伊であるが、中央をトレンチャーによる攪乱で破壊されている。胴部中段以下を欠いた深鉢を正位に埋設したものである。掘り方は直径82cmの円形のビットで、伊床面までの深さは18cmを測る。

埋甕は伊跡の南東1.3mに位置している。胴部中段以下を欠いた深鉢を正位に埋設したもので、口縁を伊跡の方向にわずかに傾けて出土した。掘り方は長径48cm、短径42cm、深さ15cmを測る。土器は下端をビット底面に接した状態で埋設される。

ビットは伊跡をはさんで東西に3本づつ、伊跡と埋甕の中間で1本検出された。深さ25~40cmを測る。

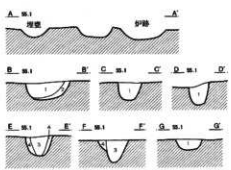
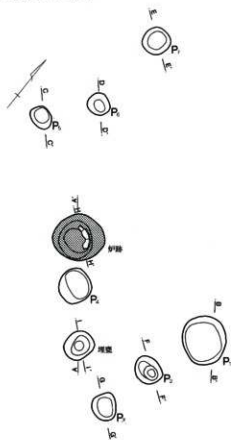
出土土器(第183図・第184図)

1は伊体土器である。胴部中段から下を欠失する。緩やかに外反する口縁で、頸部にごく弱い段を持つ。口縁部文様帯は隆帯+沈線により渦巻文と楕円形の区画が描かれる。胴部には磨消し懸垂文が垂下する。地文はRL単節の縄文が縦位回転で施文される。

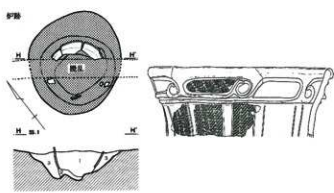
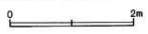
2は埋甕である。胴部中段から下を欠失する。文様構成は1とほぼ同じだが、口縁内湾し、頸部に段を持たない。口径19.5cm、現存高11.6cmを測る。

3はベン先状工具の結節沈線文が施文される破片である。4・5はキャリバー類深鉢の口縁部である。6は半裁竹管状工具による集合沈線が施文される口縁部である。7は円形刺突を伴う隆帯が器面を縦横に分割する曾利采の隆帯文土器である。

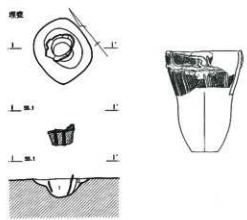
第182図 A区第64号住居跡



- A区S J 64
- 1 褐色土 : ローム粒子多く含む 締まりやや強
 - 2 黒褐色土 : ローム粒子少量、焼土粒子微量含む 締まり強
 - 3 暗褐色土 : ローム粒子やや多く含む 締まり強
 - 4 暗黄褐色土 : 褐色土若干混じる 締まりやや強



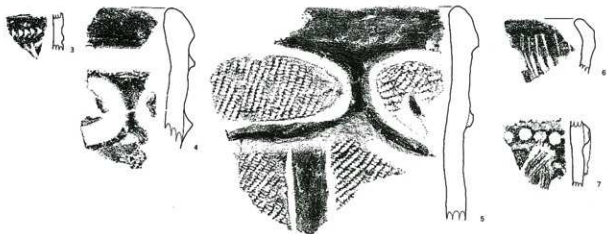
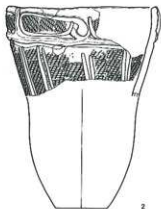
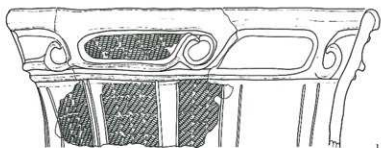
- A区S J 64円跡
- 1 黒褐色土 : ローム粒子微量、焼土粒子やや多く、炭化物微量含む 締まり強
 - 2 暗褐色土 : ローム粒子微量、焼土粒子少量、炭化物微量含む 締まり強
 - 3 暗褐色土 : ローム粒子多量、焼土粒子微量含む 締まり弱



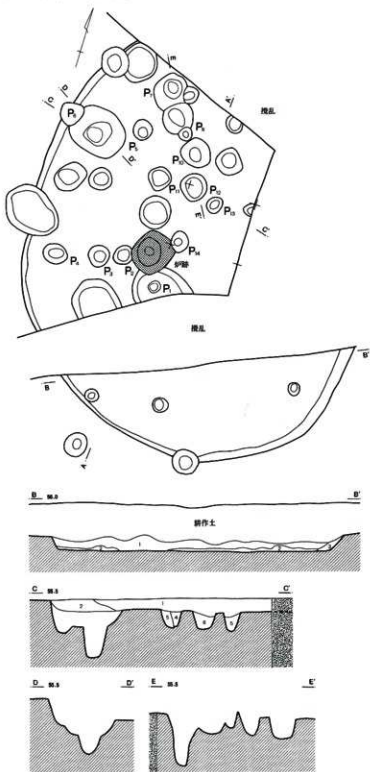
- A区S J 64埋壁
- 1 暗褐色土 : ローム粒子少量含む 締まり強
 - 2 黒褐色土 : ローム粒子・炭化物微量含む 締まり強



第183图 A区第64号住居跡出土土器



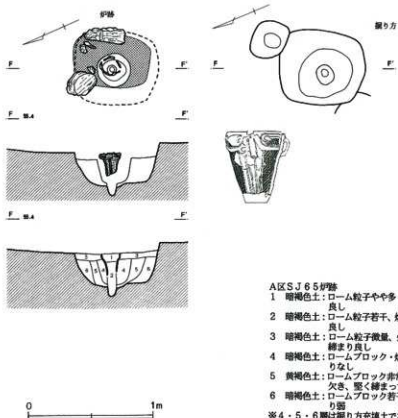
第184図 A区第65号住居跡



A区S.J 65

- 1 暗褐色土 : ロームブロック若干、ローム粒子多量、炭化物微量含む
粘性あり、締まりあり
- 2 暗褐色土 : ロームブロック多量、炭化物少量含む 粘性・締まり強
- 3 暗黄褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多量含む
- 4 暗褐色土 : ロームブロック少量、ローム粒子多量含む 締まり強
- 5 暗黄褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多量含む 締まり強
- 6 黒褐色土 : ローム粒子少量含む 締まり強
- 7 暗黄褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多く含む 締まりやや強

第185図 A区第65号住居跡跡



A区S J 65 炉跡

- 1 暗褐色土：ローム粒子やや多く、焼土粒子微量含む 粘性強、締まりよし
 - 2 暗褐色土：ローム粒子若干、焼土粒子ごく微量含む 粘性強、締まりよし
 - 3 暗褐色土：ローム粒子微量、焼土ブロック多量含む やや粘性あり、締まりよし
 - 4 暗褐色土：ロームブロック・焼土ブロック多く含む 粘性欠き、締まりなし
 - 5 黄褐色土：ロームブロック非常に多く、焼土粒子若干含む やや粘性欠き、堅く締まっている
 - 6 暗褐色土：ロームブロック若干、焼土粒子微量含む 粘性あり、締まり弱
- ※4・5・6層は掘り方充填土である

A区第65号住居跡 (第184図～第187図)

D-2・3区に所在する。A区とD区の境界部分に位置している。市道下面の配管に伴う擾乱により、床面を広い範囲にわたって破壊されている。

南北に長い楕円形の竪穴住居であったと考えられ、長径は不明、短径は5.5mを測る。主軸はN-8°-Wを指す。

壁高は残りの良い部分で24cmを測る。壁溝は検出されなかった。床面は平坦だが、北端部分で1段浅くなっている。

炉跡は隅丸長方形の石囲埋燗炉であったものと思われる。60cm×40cmの範囲に、厚さ2～4cmの厚さで焼土が堆積し、焼土の長辺側に長辺30～40cm大の伊石2点が残存する。

焼土面中央に伊体土器が埋設される。土器は小型深鉢の底部を欠いたもので、炉跡全体の規模に比べ小型である。燃焼部を囲うというよりは、煮沸具の先端を保持する支脚的な機能を考えた方がよいかもしれな

い。

炉跡の掘り方は長径67cm、短径58cm、床面からの深さ32cmの隅丸長方形のピットである。

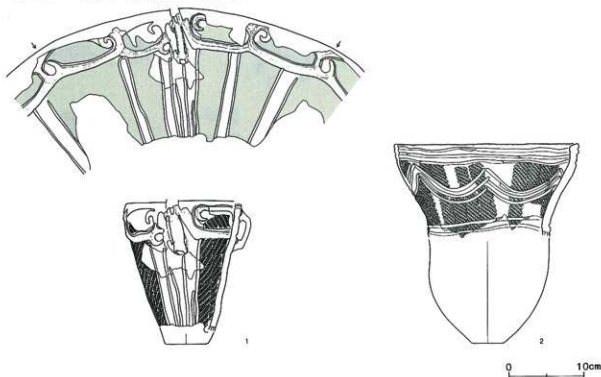
この掘り方の覆土を切って、伊体土器埋設のためのピットが穿たれている。直径7～8cmの小ピットで、炉掘り方の底面をさらに6cmあまり掘り抜いている。第185図土層断面上の1層・2層がこれにあたる。

ピットは床面北西部に集中している。これらのうちP2～4、P7～14は直径3.5mの半円形に巡っており、この部分に別個の遺構が切り合っている可能性もある。さらに擾乱による破壊で検出不能の部分が多く、本住居跡の柱穴配置は不明である。

前述の伊体土器の他、本住居跡からは縄文時代中期後葉を中心とした遺物が出土している。擾乱からの出土品も混じるものと思われ、時期的なまとまりはいま一つである。

第186図2の深鉢は住居跡中央の床面直上において破片の状態出土したもので、遺構平面図上に4カ所

第186図 A区第65号住居跡出土土器(1)



の十字で囲んだ範囲がこれにあたる。

出土土器(第186図・第187図)

1は伊体土器である。内外面ともに著しい二次焼成を受けており、出土した時点では水洗にも耐えられない状態であった。

キャリバー類の小型深鉢であるが、胴下半部から口縁に向かって一直線に開くコップ形の器形である。口端部と底部を欠失する。

口縁部文様帯は沈線によるなぞりを加えた隆帯で渦巻文と楕円形の区画が描かれる。また、口縁部文様帯の1カ所に橋梁状の把手が付される。把手は文様帯の上下の隆帯を連結するように配置され、また上方に縦位の沈線を伴う突起が存在したと思われる。

胴部には磨消し懸垂文が描かれる。橋梁把手の下には四本沈線の非常に幅広い懸垂文が配され、それ以外は二本沈線の懸垂文である。

地文はRL単節の縄文であるが、太さの異なるRの縄2本をL撚りにした異条の縄文となっている。口縁部の区画内部では横位回転、胴部では縦位回転で施文される。

口径推定14.8cm、現存高17.4cmを測る。

2は連弧文土器である。口縁直下と胴中段に3本一組の平行沈線が巡る。

同上半部に三本沈線の連弧文が描かれる。地文はLR単節の縄文が縦位回転で施文される。口縁部の平行沈線間の地文は磨り消される。また、胴部における施文は粗雑で隙間が目立つ。

口径24.2cm、現存高12.4cmを測る。

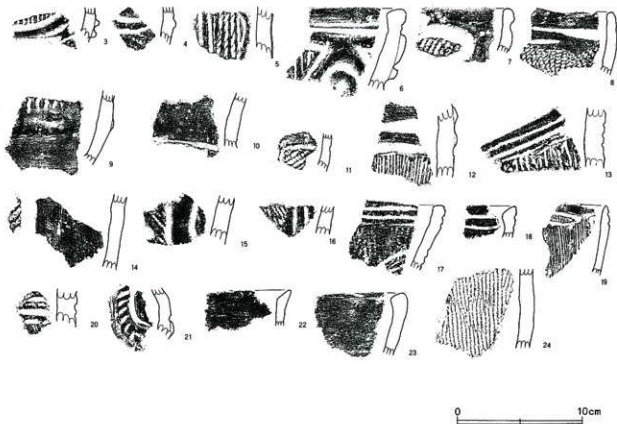
3はキャリバー類の口縁部文様帯である。二本隆帯の曲線モチーフが描かれ、地文は縦位の撚糸文である。

4は一本隆帯の曲線モチーフで、地文はRL単節の縄文である。5は深鉢胴部で、二本隆帯による懸垂文と蛇行懸垂文が交互に垂下する。地文は縦位の撚糸文である。

6はキャリバー類の口縁部で、隆帯+沈線の渦巻文が描かれ、地文は縦位の集合沈線である。7・8もキャリバー類の口縁部であるが、胴部に磨消し懸垂文を伴う新しい時期のものである。

9は内湾する無文の胴部で、微隆起線による横位の区画がみられ、区画内部に縦位の刻みがみられる。10

第187図 A区第65号住居跡出土土器(2)



はキャリバー類深鉢の頸部無文帯である。胴部との境を平行沈線で区画する。

12は横位の隆帯+沈線で器面を分帯し、地文は櫛歯状工具による縦位の条線である。13は斜行する平行沈線が描かれ、沈線間の地文が磨り消される。

14~16は磨消し懸垂文の胴部である。17~20は連弧文系の土器である。沈線間に磨消しを伴う段階のものであると思われる。19は口縁直下に横楕円形の区画を描く。20は胴部中段の区画である。

21は刻みを伴う隆帯で長方形の区画を構成するもので、浅鉢胴上半部の文様帯であろう。22・23は無文の口縁部で、浅鉢ないし曾利系の小型深鉢に伴うものと思われる。

24はR.L単節の縄文が右下がりに回転施文される胴部である。

A区第66号住居跡(第188図)

D-3・4、E-3・4区に所在する。第71・89号

住居跡、第195~197号土壇と重複するが、新旧関係は不明である。

直径5.5mの範囲に大小のピットが散在するもので、壁・壁溝は検出されなかった。したがって本住居跡の規模・平面形は不明である。

伊鉢・埋甕などの施設も検出されず、主軸方向は不明である。本住居跡に伴う遺物は出土していない。

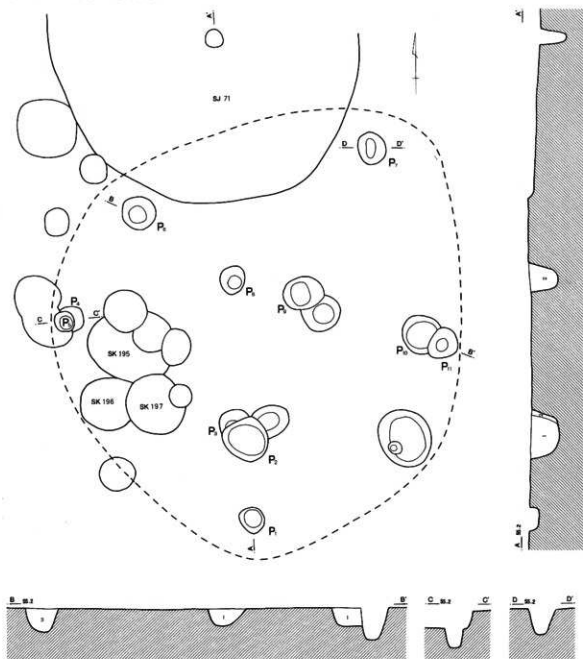
A区第67号住居跡(第189図)

E-7区に所在する。第27・39・82・96・97号住居跡、第65・66・69号土壇と重複するが、新旧関係は不明である。

第27号住居跡の周囲において、直径6mの環状にピットを検出したものである。壁・壁溝は検出されなかったため、本住居跡の規模・平面形は不明である。

伊鉢・埋甕などの施設も検出されず、主軸方向は不明である。本住居跡に伴う遺物は出土していない。

第188図 A区第66号住居跡

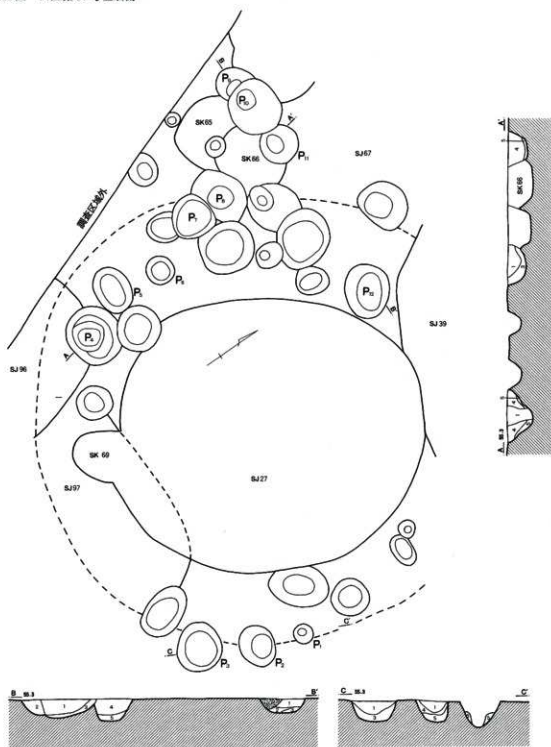


AJSJ 66

- 1 暗褐色土：ロームブロック少量含む
- 2 暗褐色土：ロームブロック・ローム粒子少量含む
- 3 暗黄褐色土：ロームブロックを多く含み、粘性に富む

0 2m

第189図 A区第67号住居跡

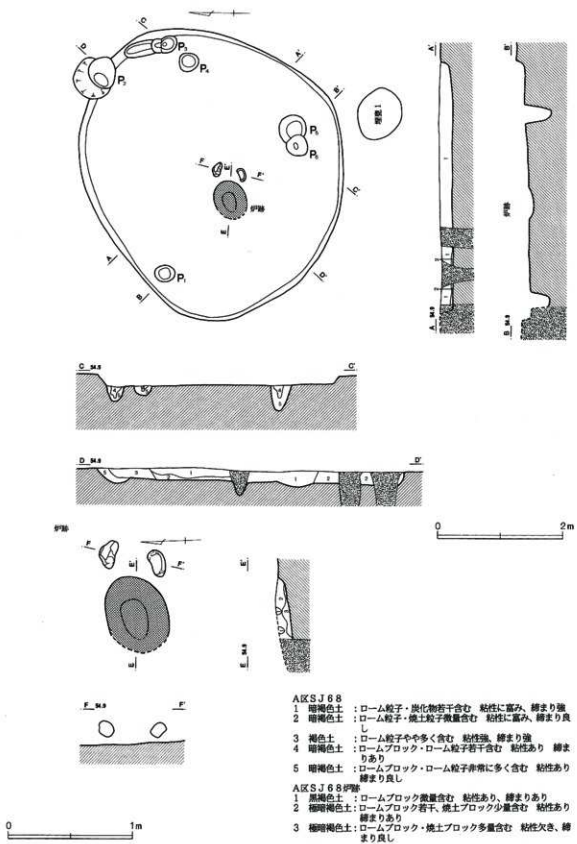


A区SJ67

- 1 黒褐色土 : ローム粒子少量含む
- 2 暗褐色土 : ロームブロック少量、ローム粒子やや多く含む
- 3 暗黄褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多く含む
- 4 暗褐色土 : ローム粒子やや多く、炭化物若干含む
- 5 暗黄褐色土 : 再堆積ローム、暗褐色土若干混じる

0 2m

第190図 A区第68号住居跡



第191図 A区第68号住居跡出土土器(1)



A区第68号住居跡(第190図～第193図)

F・G-12区に所在する。トレンチャーの攪乱が床面の広い範囲に及んでいる。

不整楕円形の住居跡で、長径4.6m、短径4.2mを測る。長軸方向は不明である。壁高は残りの良い部分で17cmを測る。床面は北西方向に向かって緩やかに傾斜している。壁溝はほとんど検出されなかった。

炉跡は床面中央からやや南西寄りに位置している。東西に長い楕円形の地床炉で、西半を攪乱により破壊されているため長径は不明、短径は50cmを測る。床面から炉床までの深さは10cmを測る。

炉跡の東で2点の河原石が出土した。いずれも長径14cm前後の自然産である。炉跡からはほぼ等距離にあり、床面から5cmほど浮いているが、破壊を受けた炉石である可能性もある。

床面上から6本のピットが検出された。深さ15～40cmを測る。攪乱によりピットの検出ができなかった部分が多く、本住居跡の柱穴配置は不明である。

覆土中から縄文時代中期後葉の土器が出土している。

出土土器(第191図～第193図)

1は連弧文系の小型深鉢である。口縁から胴部中段にかけて残存する。口縁直下と胴部中段に三本沈線の区画が巡り、胴上半部に2本の平行沈線による波状のモチーフが描かれる。地文は櫛歯状工具の条線が縦位に施文される。

2も連弧文系の土器で、深鉢胴下半部であろう。平行沈線の波状モチーフが描かれ、同様のモチーフが胴上半部にも描かれるものとみられる。地文は櫛歯状工具の条線が縦位に施文される。

3は中空の把手である。正面及び把手上面に渦巻文が描かれる。

4～7は勝坂系の深鉢である。刻みを持つ隆帯によって区画文が描かれる。4は文様帯下端を深い沈線で区画し、胴下半に縦位の燃糸文が施文される。7は半裁竹管状工具による横位の平行沈線で、中段の1条に刻みが施される。

8は口縁部文様帯の下端を区画する隆帯である。頸部には無文帯が存在する。

9は横位の隆帯区画から縦位の隆帯が垂下するもので、地文は縦位の燃糸文である。10は隆帯懸垂文が垂下する胴部である。12は口縁部文様帯下端の隆帯区画で、胴部には縦位の集合沈線が描かれる。

13～16はキャリバー類深鉢の口縁部である。隆帯+沈線による口縁部文様帯が描かれ、磨消し縄文の手法が卓越する比較的新しい時期のものである。14は小波状口縁で、それ以外は水平口縁である。

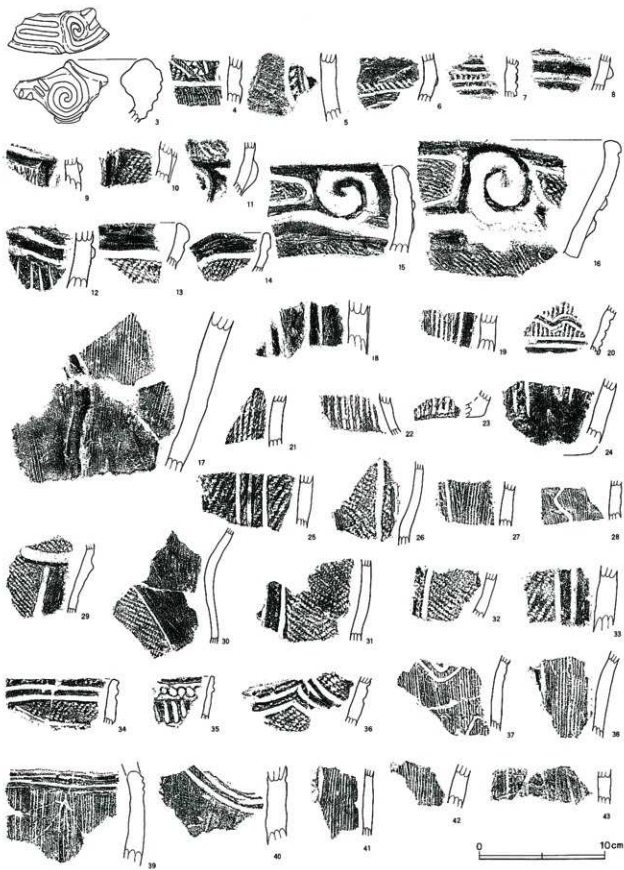
15・16は隆帯+沈線による渦巻文が描かれ、左右に楕円形の区画が構成される。地文は無節の縄文が施文される。磨消し懸垂文はみられない。

17は単独の隆帯による蛇行懸垂文が垂下する胴下半部である。地文は櫛歯状工具の条線が縦位に施文される。18・19は単独の隆帯が垂下する胴下半部である。

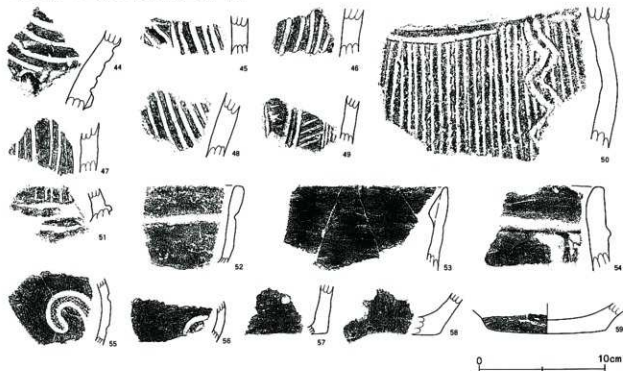
20は深鉢の頸部から胴部中段にかけての破片である。1条の隆帯に沿って半裁竹管状工具の沈線が巡る。頸部には同一工具の平行沈線で小波状のモチーフが描かれる。地文は縦位の燃糸文である。21～23は縦位の燃糸文だけが施文される破片である。

24は平行沈線の懸垂文が垂下する胴下半部である。25～27は同様の懸垂文が垂下する胴部破片である。28

第192图 A区第68号住居跡出土土器(2)



第193図 A区第68号住居跡出土土器(3)



は単独沈線の蛇行懸垂文が垂下する。

29~33は磨消し縄文のみられる胴部である。29は口縁部文様帯下端の区画から磨消し懸垂文が垂下する。30は細手の沈線による鋸歯状のモチーフが描かれ、地文はL R単節の縄文がモチーフに沿って充填される。31~33は磨消し懸垂文の胴部である。

34~43は連弧文系の土器である。34は地文縄文で、口縁部に平行沈線が巡る。35は口縁直下に沈線のなぞりを加えた隆帯が巡る。隆帯上には円形の刺突列が並ぶ。地文は棒状工具による縦位の集合沈線である。

36は三本沈線による磨消し連弧文である。37は地文条線で、平行沈線による波状モチーフが2段描かれるもので、2と同一個体の可能性がある。38・41は地文条線上に沈線による懸垂文が垂下する。

39は胴下半部で、半裁竹管状工具の沈線による横位の区画が描かれる。地文は櫛歯状工具の条線である。40は棒状工具の平行沈線による連弧文である。42・43

は縦位の条線のみ胴部である。

44~50は曾利系の土器である。44は頸部に波状の浮線文が巡り、口縁部に重弧文が描かれる。45は集合沈線間に一本隆帯の蛇行懸垂文が垂下する。46~48は類似の集合沈線が施文される破片である。

49は縦位の平行沈線が垂下し、間隔を斜位の集合沈線が埋めるものである。50は平行沈線の蛇行懸垂文が垂下する胴下半部で、地文は半裁竹管状工具による縦位の集合沈線である。

51は浅鉢胴上半部の文様帯である。52は無文胴張り浅鉢である。53は内面に稜をもつ無文の口縁部である。

54は口縁下に断面三角形の隆帯が巡る深鉢で、胴部に微隆起線による一段懸垂文が垂下する。55・56は後期初頭の土器である。J字沈線の内部に細密な縄文を充填する。57~59は無文の底部である。

A区第69号住居跡（第194図）

G-4区に所在する。東半分が調査区域外に掛かっている。また、第48号住居跡、第27・86・148号土城と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

大小のピットが直径7mの範囲に分布するもので、壁・壁溝等は一切検出されなかった。したがって本住居跡の規模及び平面形は不明である。

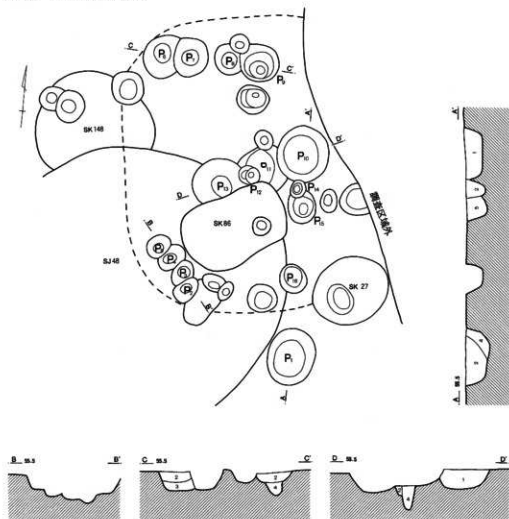
炉跡は検出されなかったが、これは削平か、土城・ピット等との切り合いによるものであろう。また、埋

塞等の施設も見えなかった。従って、本住居跡の主軸方向は不明である。

ピットは住居跡推定ラインに沿って環状に巡るほか、中央部分にも数本が分布する。遺構検出面からの深さは30~65cmを測るが、大半は40cm前後の浅いものである。壁柱穴の構成をとるものとみられるが、詳細は不明である。

本住居跡に伴う遺物は出土していないため、遺構の所属時期は不明である。

第194図 A区第69号住居跡

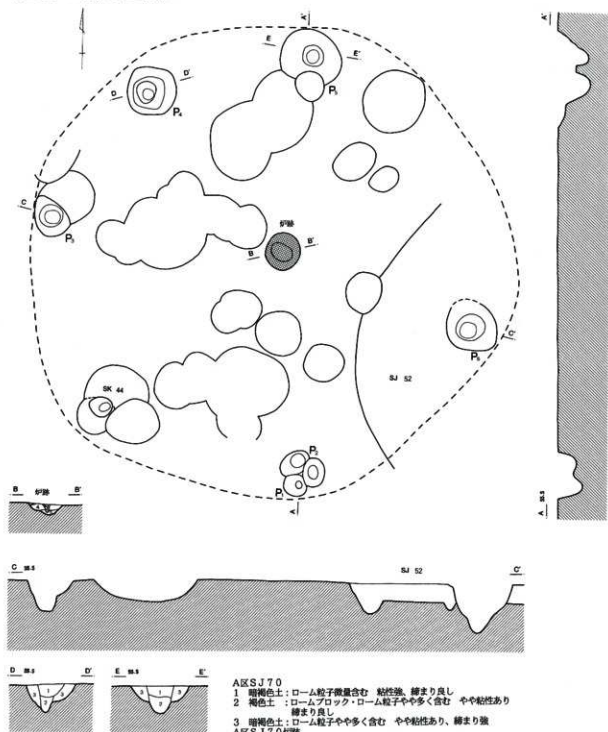


A区S J 69

- 1 暗褐色土 : ロームブロック多く含む
- 2 暗褐色土 : ロームブロック多く、褐色土多く含む 粘性欠く
- 3 暗褐色土 : くすんだローム土
- 4 褐色土 : ロームブロックやや多く含む 締まり欠く
- 5 暗褐色土 : ローム粒子微量含む 締まり強

0 2m

第195図 A区第70号住居跡



A区SJ70

- 1 暗褐色土：ローム粒子微量含む 粘性強、締まりよし
 - 2 褐色土：ロームブロック・ローム粒子やや多く含む やや粘性あり
締まりよし
 - 3 暗褐色土：ローム粒子やや多く含む やや粘性あり、締まり強
- A区SJ70F跡
- 4 暗褐色土：焼土粒子・炭化物少量含む 粘性欠き、締まりなし
 - 5 暗褐色土：ローム粒子多量、被熱ロームブロック・焼土粒子・炭化物
少量含む 粘性欠き・締まりなし

0 2m